

目 次

第 1 節——概説

| | |
|---------------|---|
| 1. 修辞とは何か | 1 |
| [1] 修辞理論萌芽期 | 1 |
| [2] 修辞理論発展期 | 1 |
| [3] 漢語修辞学の成立 | 2 |
| 2. 中国医籍の修辞的特色 | 3 |
| [1] 「比喩」の場合 | 4 |
| [2] 「模状」の場合 | 4 |
| [3] 「相形」の場合 | 4 |
| 3. 修辞学と古典医籍研究 | 5 |
| [1] 詞義の弁別 | 5 |
| [2] 句意の理解 | 6 |
| [3] 校勘訛誤の発見 | 6 |

第 2 節——間接的な表現

| | |
|-------------------------|----|
| 1. 引用—成語・故事を用いる | 7 |
| [1] 引経 — 成語を引く | 8 |
| [2] 用典 — 故事を引く | 9 |
| 2. 割裂 — 成語の一部をかりる | 10 |
| [1] 成語から一部をかりて別の一部を暗示する | 10 |
| [2] 成語から一部をかりて成語全体を略示する | 10 |
| 3. 委婉 — 避忌と謙譲の表現 | 11 |
| [1] 避忌 — 凶險・粗俗な字句を言い換える | 11 |
| ①凶險の避忌の言い換え ②粗俗の避忌の言い換え | |
| [2] 自謙 — 自己に関する字句を言い換える | 12 |

第3節——形象を表現する

| | |
|---|----|
| 1. 比喩 —— 相似の事物を借りて譬える | 13 |
| [1] 比喩の形式的分類 | 14 |
| ①明喩 ②暗喩 ③借喩 | |
| [2] 比喩の内容的分類 | 14 |
| ①形喩 ②状喩 ③質喩 ④理喩 | |
| 2. 模状 —— 同字反復の音声効果で事物を描写する | 15 |
| [1] 形状描写 | 16 |
| [2] 様態描写 | 16 |
| [3] 声音描写 | 16 |
| 3. 借代 —— ある事物を象徴する別の事物で言い代える | 17 |
| ①事物の特性を事物に代える ②事物の目印を事物に代える ③事物の性状を事物に代える ④事物の機能を事物に代える ⑤事物の所属(作者)を事物に代える ⑥事物の所在を事物に代える ⑦事物の工具を事物に代える ⑧事物の原料を事物に代える ⑨特定事物を一般事物に代える ⑩具体的事物を抽象的事物に代える ⑪部分を全体に代える ⑫結果を原因に代える | |
| 4. 相形 —— 対比的な事物を借りてある事物をきわだたせる | 19 |
| [1] 主賓相形 | 19 |
| ①主賓相似 ②主賓相反 | |
| [2] 全体相形 | 20 |
| [3] 言外相形 | 20 |

第4節——変化をもたせる表現

| | |
|----------------------------------|----|
| 1. 避復 —— 上下の詞句を変える | 21 |
| [1] 詞の言い換え | 21 |
| ①名詞 ②動詞 ③形容詞 ④代詞 ⑤副詞 ⑥介詞 ⑦連詞 ⑧助詞 | |
| [2] 詞組の言い換え | 22 |
| [3] 分句の言い換え | 22 |
| 2. 錯綜 —— 上下の呼称の範疇・詞序などを変える | 23 |

| | |
|-------------------------------------|----|
| [1] 錯名 ——上下の呼称の範疇を変える | 23 |
| ①上文に本来の呼称を挙げるもの ②下文に本来の呼称を挙げるもの | |
| [2] 錯序 ——上下一方の詞序を変える | 23 |
| ①主謂錯序 ②主謂錯序 ③述賓錯序 ④述賓錯序 ⑤状謂錯序 ⑥述補錯序 | |
| 3. 分承 ——上下の構造を変える | 24 |
| [1] 簡単分承 ——元来2個の詞組・分句であるもの | 25 |
| ①順承 ②錯承 | |
| [2] 複雑分承 ——3層構成の分承 | 26 |
| ①相同分承 ②相違分承 | |

第5節——簡略した表現

| | |
|-----------------------------|----|
| [1] 省略 | 28 |
| ①簡称 ②帶過 ③対話 ④疏略 ⑤意合 ⑥跳脱 ⑦包含 | |
| [2] 拏隅 | 31 |
| ①舉此賅彼 ②舉此見彼 ③舉偏概全 | |
| [3] 互備 | 34 |
| ①正言互備 ②反言互備 | |

第6節——均整の取れた表現

| | |
|-------------------|----|
| [1] 対偶 | 37 |
| ①正対 ②反対 ③串対 | |
| [2] 排比 | 38 |
| ①単句排比 ②複句排比 | |
| [3] 複用 | 40 |
| ①同義複用 ②反義複用 ③類義複用 | |

第7節——一貫した表現

| | |
|----------------------|----|
| 1. 遞進 ——上下が相似構造で層をなす | 43 |
| [1] 並列遞進 | 44 |
| [2] 主次遞進 | 45 |

| | |
|--|----|
| ①提高主次 ②漸減主次 | |
| [3] 相形通進 | 45 |
| ①提高相形 ②降下相形 | |
| 2. 連珠 —— 上文の結語を下文に連結させる | 46 |
| [1] 緊頂式 | 47 |
| [2] 間頂式 | 48 |
| ①「合一分」式 ②「合一分一合」式 ③「合一分一分」式 ④「合一分一分一合」式 | |
| 3. 共用 —— 上文の一成分を複句が共用するもの | 49 |
| [1] 主語の共用 | 50 |
| [2] 謂語の共用 | 50 |
| [3] 定語の共用 | 50 |
| [4] 状語の共用 | 51 |
| [5] 介詞の共用 | 51 |
| [6] 連詞の共用 | 51 |

第1節——概説

1. 修辞とは何か

「修辞」という語は古くは『周易』乾卦・文言伝に「修辞立其誠（辞を修めその誠を立つ）」とあるが、この「辞」とは唐の孔穎達の『周易正義』によれば「文教」すなわち礼楽に係わる。『論語』述而に「子所雅言、詩書執禮、皆雅言也（子の雅言する所は、詩・書、執礼、皆雅言す）」とあるように、古代には廟堂の儀礼で雅言を用いた。雅言は方言の反対、つまり今日でいう標準語である。礼楽を行うために標準語を学ぶことを「修辞」といったようだ。下って、白居易の文に「勤苦修辞」といったり、清朝の考証学者・顧炎武の詩に「平生好修辞」という「修辞」は「作文」のことである。

「文辞を修飾する」という意味で「修辞」というのはさらに下って近代以後の用法である。

段逸山『中医文言修辞』（上海中医学院出版社、1987年）では、近代の漢語修辞学の成果を踏まえて修辞理論における次のような3つの発展段階を提唱している。

業。忠信。所以進德也。脩辭立其誠。所以居業也。
知至至之。可與幾也。知終終之。可與存義也。
子曰。君子進德脩

[1] 修辞理論萌芽期：春秋戦国時代

『論語』憲問に「爲命、卑謹草創之、世叔討論之、行人子羽脩飾之、東里子産潤色之（命を為るに卑謹これを草創し、世叔これを討論し、行人の子羽これを修飾し、東里の子産これを潤色す）」とある。

これは諸侯の命令書を作成するとき「修飾・潤色」が行われたという意味であり、近代の意味での「修辞」についての記述であると言えよう。

しかしこの時代には修辞に関する系統的論述はなく、修辞法の理論は未発生であった。

[2] 修辞理論発展期：漢～清

漢の王充『論衡』語増篇、儒増篇、芸増篇には「誇張」についての記述が見られる。

- 世俗所患、患言事增其實。著文垂辭、辭出溢其眞、稱美過其善、進惡沒其罪。何則、俗人好奇、不奇、言不用也。故譽人不增其美、則聞者不快其意。毀人不增其惡、則聽者不愜於心。聞一增以爲十、見百益以爲千。

(世俗の患う所、事を言うに其の実を増すを患う。文を著し辞を垂れて、辞の其の真を出溢すれば美を称して其の善を過ぎ、悪を進げて其の罪を没む。何となれば則ち、俗人は奇を好み、奇ならざれば、言を用いず。故に人を誉めて其の美を増さざれば則ち聞く者其の意を快くせず。人を毀りて其の悪を増さざれば、則ち聴く者心恢ひろからず。一を開いて増して十と為し、百を見て益して千と為す) —— 『論衡』芸増より

藝増篇
 世俗所患、患言事增其實。著文垂辭、辭出溢其眞、稱美過其善、進惡沒其罪。何則、俗人好奇、不奇、言不用也。故譽人不增其美、則聞者不快其意。毀人不增其惡、則聽者不愜於心。聞一增以爲十、見百益以爲千。

「増実」(誇張)を「患」とし、また「俗人好奇」をその理由とするように批判的ではあるが、字面通りで解釈してはならない修辞現象をはっきりと理論化している。

魏晋南北朝では魏の曹丕『典論』、晋の陸機『文賦』、斉の劉勰『文心雕龍』、北齊の顔之推『顔氏家訓』などがそれぞれ含蓄、省略、引用(援引・用事)などの修辞格について言及している。『顔氏家訓』勉学篇では「援引古昔、必須眼學、勿信耳受(古昔を援引するに、必ず須く眼にて学ぶべし、耳に受くるを信ずる勿れ)」と引用する心得をいい、また同じく文章篇では「用事誤者有矣。或育不同、書儻堙滅、後人不見、故未敢輕議之(用事に誤る者は有り。或いは同じからざる有り、書儻し堙滅すれば、後人は見ず、故に未だ敢て軽がるしく議せず)」と古書における逸文引用の重要性を述べている。

下って宋の沈括『夢溪筆談』、陳騷『文則』、明の高琦『文章一貫』などは相錯、比喻十法、引用十四法について述べる。

清朝考証学が登場すると、さらに避複、暈字、相形など多くの修辞格について研究された。

[3] 漢語修辞学の成立：20世紀

1898年馬建忠『馬氏文通』が出て、西洋言語学の「文法」に基づく漢語語法学が誕生すると、修辞理論も本格的な理論研究の時代に入った。

その結果、唐鉞『修辞格』(1923年)、張弓『中国修辞学』(1926年)、陳望道『修辞学發凡』(1932年)、楊樹達『中国修辞学』(1933年)など多くの専述書が著された。

2. 中国医籍の修辭的特色 (『中医文言修辭』より翻訳)

中国医学理論の形成を見れば、それはたんなる医療実践と生活体験の概括であるばかりでなく、また天文・暦法・気象などの自然科学ないし陰陽・五行・精氣神などの哲学思想による影響と制約に密接に関係している。例えば中国医学理論の特色の一つである整体観についていえば、これは人と自然を包含し、人体の表裏上下の2部構造に及んでいるが、これには明らかに古代哲学の天人相關思想の影響が見られる。

このような抽象的哲理を具体的事象に転じ、体験的にしか知り得ないことを表現できるように、

また知りたい医道を知り易くするために、古人は情慮をつくし、その文章中に修辭手法を大量に用いたのであり、これは切実にしかつ有効な表現方法だったのである。

脈象と病証を例に挙げて説明しよう。脈象は往々にして「展転相類」するゆえに「心中易了、指下難明(心中に了り易く、指下に明らめ難し)」(『脈経』序)の説がある。しかし脈診は望聞問切の四診の重要な一診であり、昔から中国の医師たちは「指下功夫」を極めて強調する。

また病証は千變万化であり、一人一人異なるものであるが、その病証を確定することが治療を行うための必要前提条件であり、昔から中国の医師たちは弁証療治を非常に重視してきた。

(2) 第二、祖国医学的特点。
洋洋大观的中医理论之形成，不唯是医疗实践和生活体验的概括，还同古代的自然科学(如天文、历法、气象)乃至哲学思想(如阴阳、五行、精气神)的渗透和制约密切相关。即以中医理论的特点之一整体观念而言，它包含着人与自然界以及人体的表里上下这两个部分的内容，这，特别是前者，就明显地受到古代哲学中天人相参思想的影响。面对着近于玄虚的哲学思想的“侵入”，可以意会难以言传的实践经验的运用等等，难怪前人曾对医道发出“此事难知”的慨叹(6)。为使抽象的哲理转为具体，为使仅可意会的经验变为可以言传，为使难知的医道成为易知，古人殚精竭虑，采取了种种措施，修辭手法在文章中的大量使用，便是其中一个切实有效的方法。
就拿脉象和病证来说吧。脉象往往“展转相类”，故向有“心中易了，指下难明”之说(7)，而脉诊又是望闻问切四诊中至为重要的一诊，所以中医极其强调指下功夫；病证千变万化，犹如人各一面，而确定病证又是施行治疗的必要前提，所以中医非常重视辨证论治。正由于这样，因而对“展转相类”的脉象和千变万化的病证，使用比喻、摹状、拟形等形象化修辭手法的文字，在古代医学著作中，可以说比比皆是。如比喻，古代医家常以脉象和病证为正文，以人所习知而又形象生动的事物为喻文。“三部脉如釜中汤沸，朝得暮死，夜半得，日中死，日中得，夜半死(8)。”以炊器中开水沸腾之状来加以比方，则三部脉奔涌之象也便如同目睹。“久久吐酸如米粥者，为肺痿(9)。”以人所日见的米粥来比方肺痿患者吐出的脓，自然是一目了然。如摹状，古代医家每喜运用叠字的形式

このような事情により、展転相類する脈象や千変万化の病証に対して、古典医籍の中では「比喩」「模状」「相形」などの様子を表す言い方の修辞手法が用いられている。

[1] 「比喩」の場合

脈象や病証が「正文」（説明したい事柄）、よく知られたあるいは生き生きした事柄が「喩文」（たとえられる事柄）になっている。

●三部脈如釜中湯沸、朝得暮死、夜半得日中死、日中得夜半死。——『脈経』4巻・8
これは「釜中湯沸」で三部の脈が奔騰する様子をたとえているのである。

●久久吐膿如米粥者、爲肺癰。——『金匱要略』卷上・7
これは人々が日常見慣れている米粥で肺癰患者の吐く膿の様子をたとえているのである。

[2] 「模状」の場合

同じ字を2回くり返す畳字形式を運用して脈象・病証を形容している。

●虚脈、遲大而軟、按之不足、隱指豁豁然空。——『脈経』1巻・1
「豁豁」は虚脈の「空大無力」の様子を描写する語である。

●語声暗暗然不徹者、心膈間病。——『金匱要略』卷上・1
「暗暗」の暗は唾に通じ、病人の語声が低微な状を模しており、「不徹」すなわち明瞭に聞き手の耳に透徹しないことをいう。

[3] 「相形」の場合

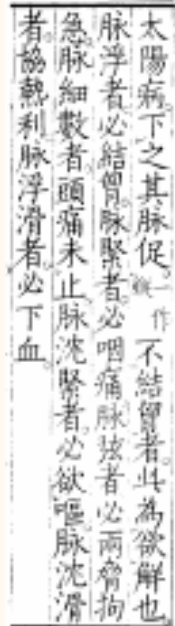
しばしば相似の件で脈象や病証が対比され、弁証の要点が際立たせられる。

●太陽病、下之、其脈促、不結胸者、此爲欲解也。脈浮者、必結胸。脈緊者、必咽痛。脈弦者、必兩脇拘急。脈細數者、頭痛未止。脈沈緊者、必欲嘔。脈沈滑者、協熱利。脈浮滑者、必下血。——『傷寒論』140

ここでは太陽病に誤って下法を施した後の各種の病変の枢機の弁別を、脈象の「促・浮・緊・弦・細数・沈緊・沈滑・浮滑」という差異に対比させている。

- 発汗後、悪寒者、虚故也。不悪寒、但熱者實也。當胃氣、與調胃承氣湯。 ——『傷寒論』70

これは太陽病の発汗後の病人の悪寒と不悪寒の差異を虚証と実証の弁別の關鍵としているのである。



3. 修辞学と古典医籍研究

中国医籍修辞学を学び、またその知識を把握することにより、古典医籍の研究に当たって詞義の弁別、句意の理解、さらには伝本の校勘訛誤の発見などに結びつくことがある。

[1] 詞義の弁別

一つにはいわゆる「望文生義」(文面からのこじつけ)をふせぐことである。修辞学知識の応用によって字義通りの解釈に陥って原義をそこなう誤りを避けることができるのである。

- 病人身大熱、反欲得衣者、熱在皮膚、寒在骨髓也。身大寒、反不欲近衣者、寒在皮膚、熱在骨髓也。 ——『傷寒論』11

この「皮膚」や「骨髓」を一般的な詞義で解釈してはならない。皮膚は「外表」を、また骨髓は「内裏」を表す「借代」(ある事物を象徴的な別の事物で表現する)という修辞方法により、前分句は「仮熱真寒」を、後分句は「仮寒真熱」を表現しているのである。

もう一つは「避復」(反復を避ける)、すなわち異なる詞語を用いて同じ意義を表すことによって同詞語の反復を避けるという修辞方法である。これによってある詞語の未詳の詞義を類推できることがある。

- 頭風頭痛、刺申脈與金門。眼痒眼疼、瀉光明于地五。 ——竇漢卿『鍼經標幽賦』

「申脈與金門」と「光明于地五」は同じ構文で、2つの穴名とそれを結ぶ並列連詞からなり、「于」は「與」と同じ並列連詞の避復であって、対象を表す介詞にとつてはならない。

[2] 句意の理解

「耳目聰明」のように、本来は「耳聰、目明」という2つの分句であったものを1つにまとめた構文がある。句意を解釈する時「聰明」を分けてそれぞれ「耳、目」を承けるのでこうした修辞方法を「分承」という。

● 古人必近三十、二十而後嫁娶。 —— 朱震亨『格致余論』

ここでは「嫁」は女性の結婚、「娶」は男性の結婚をいい、「(男) 必近三十而後娶、(女) 必近二十而後嫁」という2分句に分けて解釈しなければならない。

「三十二十而後嫁娶」のような場合ではひとまとめの複句を2つの分句に分けて解釈するが、逆に前文と下文の内容を合わせて解釈すべき「互備（または互文）」という修辞方法がある。

● 寒氣入經而稽遲、泣而不行、客于脈外則血少、客于脈中則氣不通、故卒然而痛。 —— 『素問』 舉痛論

この「血少」と「氣不通」を合わせて、「血少」は「血氣少」、また「氣不通」は「血氣不通」と解釈しなければならない。それは引用文のあとに「血氣亂」、「血氣散」などの字句が見られることから証される。

[3] 校勘訛誤の発見

修辞方法が決まった形式をそなえていることから、医籍版本の重要な校勘訛誤が発見されることがある。

● 寒氣客於脈外則脈寒、脈寒則縮蹇、縮蹇則脈絀急、則外引小絡、故卒然而痛。 —— 『素問』 舉痛論篇

ここでは「頂真」（または「連珠」）という、上句の末尾が下句の冒頭にくり返

而不行。客於脈外則血少。客於脈中則氣不通。故卒然而痛。

寒則縮蹇。縮蹇則脈絀急。則外引小絡。故卒然而痛。

され、A則B，B則C，C則D…のように続く修辞方法が用いられている。『素問』明刊・顧從徳本の中では「縮蹇則脈絀急」の後に「絀急」の2字がくり返されなければならないのに、くり返されていない。『素問』元刊本などに従い、2字を補って解釈すべきところであろう。

- 補、須一方實、深取之、稀按其痛、以極出其邪氣。一方虚、淺刺之、以養其脈疾按其痛、無使邪氣得入。 — 『靈樞』終始

ここでは文意から見れば「一方實…出其邪氣」は刺鍼の瀉法について、また「一方虚…無使邪氣得入」は刺鍼の補法について述べている。その修辞方法を見ると、冒頭がもし「補瀉、須一方…」であったならば「[2]句意の理解」で見た「分承」の形式に合致することになる。すなわちこの場合は「補、須一方虚…」と「瀉、須一方實…」の2分句に分けて解釈しなければならない。『太素』三刺の楊上善注では「補下脱一寫字」とする。

其痛以極出其邪氣
一方虚淺刺之以養其脈疾按其痛
補須一方實深取之稀按

第2節——間接的な表現

1. 引用 —— 成語・故事を用いる

引用とは古人の成語もしくは故事をかりてある問題を説明したり、自分の考えを証明しようとする修辞手法である。

引用には内容的に古人の成語を引く「引経」と故事を引く「用典」があり、構造的に引用を明示する「明引」とそうでない「暗用」に分けられる。

引用句の一般構造として「引語＋引文」という原型が想定され、引語とは引用を導く部分、引文は引用された内容をいう。いわば引文が引用句の主言説、引語はそれを導く補助言説であるから引語の省略が可能となり、明引は引用句の完全形、暗用は引語を省略したものとも考えられる。

さらに引語の一般構造として「著者名／書名＋言説動詞（曰、言、謂）」が考えられ、その完全形、著者名・書名の代称形、著者名・書名の省略形、その他がある。

著者名と書名のあるもの： (例)「張仲景傷寒論曰」

著者名のあるもの： (例)「李時珍曰」

書名のあるもの： (例)「故刺法曰」

著者名・書名が代称のもの：(例)「聖人曰」「經言」「論言」「法曰」

著者名・書名のないもの： (例)「故曰」「余聞」「所謂」「此之謂也」「何謂也」
「何也」「故」「譬猶」「是知」

[1] 引經 —— 成語を引く

●陽明者、胃脈也。胃者、六府之海、其氣亦下行。陽明逆、不得從其道、故不得臥也。下經曰、「胃不和、則臥不安」、此之謂也。 —— 『素問』逆調論篇

始めに陽明の上逆によって安臥できなくなるという説を述べ、『下經』という古医書から成語を引いてそれを証明する。「下經曰…此之謂也」は間に引文を含む引語で、書名(おそらく簡称)がある。

●余聞刺法言「有餘者寫之、不足者補之。」 —— 『素問』調經論篇

●經言「有餘者寫之、不足者補之。」 —— 『素問』癰論篇

この2例の引用句では引文が完全に同一である。前の例の引語は「余聞刺法言」、あとの例では「經言」であるから、あとの例の「經」は『刺法』という書名の代称であることがわかる。

●「有餘者寫之、不足者補之」此之謂也。 —— 『靈樞』根結

またしても引文は前2例と同一である。引語「此之謂也」には書名もその代称もないが、その内容から『刺法』を出典とすることがわかる。

●譬猶「渴而穿井、鬪而鑄錐。」 —— 『素問』四氣調神大論篇

多紀元簡は「晏子春秋」雑上との類似を指摘しているが、そこに「溺而後問墜、迷而後問路、譬之猶臨難而遽鑄錐、噎而遽屈井、雖速亦無及已」の字句が見える。おそらくこれを出典として「聖人不治已病、治未病」の説を証明しようとしたものであろう。

●「得神者昌、失神者亡。」——『素問』移精變氣論篇

引語に相当するものはまったくないが、この句は兵書『六韜』龍韜・奇兵に「其成與敗、皆由神勢、得之者昌、失之者亡」とあるのにもっとも近い。馬王堆出土『十六經』には「順天者昌、逆天者亡」の表現も見え、古代の成語であったと思われる。

[2] 用典 —— 故事を引く

●紀稱、望龍光知古劍、覘寶氣辨明珠。故萍實商羊、非天明莫洞。厥後博物稱華、辨字稱康、析寶玉稱倚頓。亦僅僅晨星已。——『本草綱目』序

「紀稱（古書に称える）」は引語に相当する。

「望龍光知古劍」：『晋書』張華伝によると張華が晋の宰相であった時、斗牛二宿の間（射手座～やぎ座の辺り）に紫気があるのを望んで、人びとにその故を問うたところ雷煥が「豫章豊墳の劍気が天に上っているのです」と答えた。そこで雷煥を豊城の県令に任じ、赴任して地を掘った雷煥は龍泉、太阿の二ふりの劍を得た。

「覘寶氣辨明珠」：『杜陽雜編』によると、唐の肅宗が即位した時、国庫を管理する役人から庫中に宝気が立ちこめていると報告があった。肅宗は外からそれを見て、父・玄宗から賜った上清珠の気であろうといい、開けてみると果たして言の通りであったという。

「故」は引語。

「萍實商羊、非天明莫洞」：『説苑』弃物によると楚の昭王が長江を渡った時、舟が斗くらいの大きさの物に触れた。王が大いに怪しんで孔子に問わせたところ浮き草の実で覇者のみこれを得る吉祥であった。また齊国で一足の鳥が殿前に下りて翅を展げて跳んだ。齊侯が孔子に問わせると大雨の前に出現する商羊という鳥で、果たして大雨となった。

「厥後」は引語。

「博物稱華、辨字稱康」：晋の張華は『博物志』を著し、当時第一であった。また『芸文類聚』の引く『神仙伝』によると深山の石室中で見つかった巻き物の字を竹林七賢人の一人嵇康が知っていたという。

「析寶玉稱倚頓」：『孔叢子』によると魯の倚頓は殖貨の術に長じていたとされ、富によって宝玉も商い宝玉の識別にすぐれていたらしい。

「晨星」は夜明けの星、希少（僅僅）のたとえ。

2. 割裂 —— 成語の一部をかりる

割裂とは古人の成語で特に人口に膾炙したものの一部をかりて、いわんとする意味に含蓄を持たせて強調する修辞手法である。

[1] 成語から一部をかりて別の一部を暗示する

『論語』為政に「子曰、吾十有五而志于學、三十而立、四十而不惑、五十而知天命、六十而耳順、七十而從心所欲、不踰矩」とあることから十五歳を「志学」、三十歳を「而立」などというのがよく知られる割裂の用例で、これは成語から一部をかりて別の一部を意味している。

●病機之安危倚伏、莫不由是。 —— 喻昌『寓意草』序

喻昌は清初の名医で、「治病必先識病」という弁証論治をとなえた。

この「倚伏」は『老子』58章の「禍兮福之所倚、福兮禍之所伏」から動詞2字をかりて、直接いわない主語2字「禍福」の方をあらわしている。倚伏が志学、而立にあたり、禍福が十五、三十にあたるわけである。

[2] 成語から一部をかりて成語全体を略示する

宋の医家、王執中の経穴学書『鍼灸資生経』の書名の「資生」は『易経』坤卦に「至哉坤元、萬物資生」（なんと至大であることか、地徳のはたらきは。万物はそこから生まれる）とあるのを出典とする。鍼灸治療にとって万物がそこから生まれるものは経穴であり、「鍼灸資生」と言えば「至哉経穴」を連想させる。「資生」は出典の成語の一部をかりているが、成語全体の意味を代表しており、志学で十五をあらわすのとは異なる割裂のもう一つの用法である。

●長沙論、嘆高堅。 —— 陳修園『医学三字経』

「長沙」は長沙の太守であった張仲景を指し、「論」はその著作のこと。「高堅」は『論語』子罕の「仰之彌高、鑽之彌堅」（仰げば仰ぐほどいよいよ高く、切り込めば切り込むほどいよいよ堅い）を出典として、成語全体で張仲景の著作を形容している。

このように、割裂は出典の知識なしに字句だけを見ても理解することが困難であり、出典の知識がなくても文意を類推することが不可能ではない引用と異なる。

3. 委婉 —— 避忌と謙讓の表現

[1] 避忌 —— 凶險・粗俗な字句を言い換える

① 凶險の避忌の言い換え

「死」という語を委婉の語に言い換え、「不幸」「歿(没)」「去」「逝」「化」などという。死者の生前の社会的地位によって言い換えが異なる場合もあり、『春秋公羊伝』によれば天子に「崩」、諸侯に「薨」、大夫に「卒」、士に「不禄」といった。

また死と関係のある事物も言い換えられ、屍衣は「寿衣」「明衣」、墳墓は「寿冢」「寿臧」、祭台は「明堂」といわれた。

しかし『素問』『靈枢』を通じて「死」字は五百数十例みられ、逆に「歿(没)」「去」などを死の言い換えに用いる例は「度百歳乃去」(『素問』上古天真論篇)などわずかしかない。

『傷寒論』序には「余宗族素多、向餘二百。建安紀年以來、猶未十稔、其死亡者、三分有二」という件りがある。本文にも「死」字は多い。

『金匱要略』でも「五臟死脈」の記述や多くの「救卒死方」がある。

死を避けて通ることのできない医書においては凶險の避忌を行う余地がなかったのではないだろうか。

② 粗俗の避忌の言い換え

前陰後陰に係する一連の事柄は、古人に粗俗とみなされ、大雅の堂に登ることを許されず、啓齒落筆(口に出して言い、文字で書き表す)を恥じられた。そこで委婉の語に言い換えられるのを常とした。

● 小大不利治其標、小大利治其本。 —— 『素問』標本病伝論篇

清初の訓詁学者・黄生の『義府』に「凡言後竅爲[大]、前竅爲[小]」とあり、したがって「小大」は「前竅・後竅(前陰・後陰)」の言い換えであることがわかる。

●男子色在于面王、爲小腹痛、下爲卵痛、其圍直、爲莖痛、高爲本、下爲首。

——『靈樞』五色

「卵」「莖」は男性器の言い換えであり、「本」は莖の基部、「首」はその先端を言う。

●礬石、杏仁。右二味、末之、煉蜜和丸、棗核大、内蔵中、劇者再内之。

——『金匱要略』婦人雜病脈証并治

「内蔵中（蔵中に内る）」の「蔵」は女性器の言い換えである。

また性行為を意味する表現も直接的な字句は避忌され、委婉な語に言い換えられることが多かった。中国医学では腎精が人体生命の本とされ、性行為の過度は健康を損ない、はなはだしきは生命の危険すらあると考えたので、医書にそれを戒める言及は多い。

●醉若飽以入房。 ——『素問』厥論篇

●行陰用力、氣不能復。 ——『靈樞』口問

●新内勿刺、新刺勿内。 ——『靈樞』終始

「入房」「行陰」「内」はすべて性行為を表す直接表現を委婉な語に言い換えたものである。

また、生殖領域に関連した事柄も言い換えられ、「陽事」は男性の性機能を意味する。さらに「身重」は妊娠、「坐草」は出産を言い換える委婉な表現である。

[2] 自謙——自己に関する字句を言い換える

自称の語を謙讓して言い換える語として、君主に対する「臣」、それ以外の「僕」「愚」「小人」「不肖」などがある。

このほか、自分の一般的な言動を形容したり、また自己の職務を謙遜するさまざまな委婉の表現がある。一般的な言動では次のようなものがある。

●於是、以孤陋之聞、集成語録二篇、以告同志。 ——吳昆『脈語』序

「孤陋之聞」とは狭量な見識。自分の見識をそう謙遜した。

●余難不敏、僭請陳之。 ——王履『医経溯回集』

「不敏」は聡明でない。「僭」は本分を越えて。

●聊爲下里巴音、以冀白雪之和云爾。 ——徐彬『金匱要略論注』

「下里巴音」は楚の民謡で自分の注釈を卑俗な言辞と謙遜し、「白雪」は「陽春白雪」という優雅な歌曲で『金匱要略』本文をたたえる。

また自己の職務を謙遜する一連の言い方は次のようなものである。

●僕添醫業、自幼徂老、耽味仲景之書、五十餘年矣。 ——『注解傷寒論』斂器序

「添」は恥ずかしながら医業を行うという謙遜の辞。

●長值危時、遂苟生于方技。 ——羅天益『衛生寶鑑』

「苟生」は辛うじて生き長らえて。

●臣等承乏典校、伏念旬歲。 ——『素問』新校正序

「承乏」は適任でないにもかかわらず引き受けた。

第3節——形象を表現する

第1節—概説の「2. 中国医籍の修辭的特色」でふれたように、指下功夫の微妙な脈象や千変万化の病証を表現するための、相似の事物を借りて譬える比喻、同字をくり返す模状、対比によって要点を際立たせる相形などのさまざまな形象表現は医書における修辭方法の特色といつてよい。

1. 比喻 ——相似の事物を借りて譬える

2つの性質が異なる事物の相似点を利用して、一方の事物を借りてもう一方の事物に

譬える修辞方法を「比喻」という。

比喻は形式的に明喩・暗喩・借喩に分けられ、また内容的に形喩・状喩・質喩・理喩に分けられる。

[1] 比喻の形式的分類

「三部脈如釜中湯沸」（『脈経』4巻・8）という比喻句で、説明したい「三部脈」を「正文」、譬えられる「釜中湯沸」を「喩文」、「如」を「喩詞」という。比喻を形式的に分類すると、この3要素を備えた明喩、喩詞が省略された暗喩、喩文だけからなる借喩に分けられる。

①明喩：正文・喩文・喩詞がある

- 頭痛如破。——『素問』瘧論篇
- 色蒼蒼如死色。——『靈枢』厥病
- 臨機應變、如對敵之將、操舟之工。——朱震亨『局方發揮』
- 富貴家兒、暖衣厚味、少見風日、脾胃脆弱、不經勞苦、凡遇小疾、亦爲大病、譬之陰地之草木、豈能御冰霜烈日乎。——『張氏医通』

②暗喩：喩詞が省略される

- 舊恨春江流不盡。——辛棄疾・詩
- 難經・甲乙、醫之庸・孟也。——『医方考』付録『鶴皋山人伝』

③借喩：喩文だけからなる

- 燕雀安知鴻鵠之志哉。——『史記』
- 如實邪久留、正氣已不復支、或大便溏瀉、則英雄無用武之地。——唐宗海『血証論』

[2] 比喻の内容的分類

比喻は喩文が表示する内容から見て、事物の外形的特徴を譬える形喩、事物の状況的特徴を譬える状喩、事物の性質的属性を譬える質喩、論証のたとえに比喻を用いる理喩の4種に大別される。

①形喩：事物の外形的特徴を譬える

- 肝脈來…如琴瑟之弦。 ——『脈經』3卷・1
- 婦人臧腫如瓜。 ——『脈經』9卷・7
- 夫水病人、目下有臥蠶。 ——『金匱要略』14
- 婦人少腹滿、如敦狀。 ——『金匱要略』22

②状喩：事物の状況的特徴を譬える

- 効之信、若風之吹雲、明乎、若見蒼天。 ——『靈樞』九針十二原
- 腰今本作腹重如帶五千錢。(1 錢 = 4 𦍇) ——『金匱要略』11

③質喩：事物の性質的属性を譬える

- 甘草國老、大黃將軍。 ——陶弘景『本草經集注』
- 其虛實之辨、若冰炭之反也。 ——陳修園『医学源流』注

④理喩：論証のたとえに喩を用いる

a. 先論後喩——先に論述し、あとで喩をあげる

- 經絡不明而欲致夫療疾、猶習射而不操弓矢。 ——宋濂『医家十四經發揮』序

b. 先喩後論——先に喩をあげ、あとで論述する

- 其水火既盛、尚不能止遏、況病既成、豈能治歟。 ——『丹溪心法』

c. 寓理于喩（理を喩に寓す）——喩のみで直接論述しない

- 辨專車之骨、必俟魯儒。

（昔、呉王が越を占領して馬車いっばいの巨大人骨を得た。魯儒すなわち孔子はこれは古代の聖王禹に滅ぼされた防風氏の遺骨であるといった。） ——『本草綱目』王世貞序

2. 模状 ——同字反復の音声効果で事物を描写する

同一の字を反復する音声的效果を利用して、事物の形状・様態・声音などを描写する修辞現象を「模状」という。「堂堂」、「洒洒」といった同一字の反復は疊字・双字・重言などと呼ばれ、表現効果を増幅するはたらきがある。

疊字による模状は『素問』『靈樞』を通じて131組、『傷寒論』には28組、『金匱要略』には22組が見られ、医書に顕著な形象表現といってよい。模状は形状描写、様態描写、声音描写の3種類に分けられる。

[1] 形状描写：事物の形状を描写する

- 平心脈來、累累如連珠。(累累：重積貌) ——『素問』平人氣象論篇
- 瘦人者、皮薄色少、肉廉廉然。(廉廉：消瘦骨立貌) ——『靈樞』逆順肥瘦
- 脈藹藹如車蓋者、名曰陽結也。(藹藹：浮輕貌) ——『傷寒論』弁脈法
- 脈綿綿如瀉漆之絶者、亡其血也。(綿綿：連綿貌) ——『傷寒論』

[2] 様態描写：事物の様態を描写する

- 三焦手少陽…是動則病耳聾渾渾焮焮。(焮通「沌」、渾渾沌沌：不聰貌) ——『靈樞』經脈
- 齶齶惡寒。(齶齶：寒慄貌) ——『傷寒論』弁太陽病脈并治
- 心憤憤、反譎語。(憤憤：煩乱貌) ——『傷寒論』弁陽明病脈并治
- 靖言了了。(了了：不乱貌) ——『脈經』8卷・9

[3] 声音描写：事物の声音を描写する

- 喘息喝喝然、取足少陰。(喝喝：喘息声) ——『靈樞』雜病
- 淅淅惡風。(淅淅：風声) ——『傷寒論』弁太陽病脈并治
- 語聲啾啾然、細而長者、頭中病。(啾啾：細碎声) ——『金匱要略』1
- 水走腸間、瀝瀝有聲、謂之痰飲。(瀝瀝：水声) ——『金匱要略』12

『素問』『靈樞』の疊字模状例

| | | | | |
|------|------------|-----------|----------|-----------|
| 形状描写 | 蒼蒼 (青色) | 招招 (長軟貌) | 窈窈 (深奥貌) | 冥冥 (無形象) |
| | 徐徐 (似有似無状) | | | |
| 様態描写 | 汨汨 (煩悶貌) | 默默 (沈黙貌) | 惚惚 (恍惚貌) | 循循 (有次序貌) |
| | 惕惕 (恐怖貌) | 喘喘 (氣息急状) | 辟辟 (堅状) | 眴眴 (目眩貌) |
| | 洒洒 (寒貌) | 熯熯 (甚熱状) | 几几 (緊状) | 漉漉 (水下貌) |
| 声音描写 | 濯濯 (水声) | 邑邑 (水声) | 穀穀 (水声) | 向向 (腹内鳴声) |

3. 借代 ——ある事物を象徴する別の事物で言い代える

類似しない2つの事物の間になんらかの不可分の関係がある場合、一方の事物が他方の事物の象徴として言い代えられる修辞方法を「借代」という。たとえば「一日不見、如三秋兮（一日見ざれば三秋の如し）」（『詩経』王風・采葛）では「秋」は「年」の象徴的言い代えである。

借代には多くの種類があるが、医書で常見されるのは以下の12種とされる。

①事物の特性を事物に代える

- 痛乃刺之、以月死生爲數。（生：前半）（死：後半） ——『素問』繆刺論篇
- 民病寒熱（寒熱：瘧疾） ——『素問』六元正氣大論篇
- 根莖花實、有名咸萃。（根莖花実：植物薬） ——『新修本草』序

②事物の目印を事物に代える

- 刺布衣者、深以留之。（布衣：平民） ——『靈樞』根結
- 此證爲黄冠之流醫治敷。（黄冠：道士） ——『医学正伝』

③事物の性状を事物に代える

- 若非良善精博、難爲取愈。（良善：良医） ——『中藏経』
- 婦人陷經漏下、黒不解。（黒：黒血） ——『金匱要略』22

④事物の機能を事物に代える

- 欲治其始、先建其母。（母：胃気） ——『素問』五藏生成論篇
- 倉廩不藏者、是門戸不要也。（倉廩：脾胃、門戸：二陰） ——『素問』脈要精微論篇

⑤事物の所属（作者）を事物に代える

- 長沙論、嘆高堅。（長沙：長仲景） ——陳修園『医学三字経』
- 宋王惟一集五家之説、而醇疵或相亂、惟虞氏粗爲可觀。

（虞氏：虞庶『難経注』の書名に代える） ——『針灸大成』針灸源流

⑥事物の所在を事物に代える

- 田野皆識之。(田野：人民) ——『新修本草』
- 有滅門之禍。(門：一族) ——『上清紫庭追勞仙方』

⑦事物の工具を事物に代える

- 書既竣、將付諸剞劂。(剞劂＝彫板刀：印刷) ——『医学心悟』序
- 丹鉛槧錄、而包括無遺也。(丹鉛＝丹砂・鉛粉：校書具) ——『臟腑証治図説人鏡經』

⑧事物の原料を事物に代える

- 縱綺羅滿目、勿左右顧眄。(綺羅：美服) ——『千金方』
- 其理廣大、其道淵微、傳之竹帛。(竹帛：書物) ——『靈樞經集注』序

⑨特定事物を一般事物に代える

- 百藥不入、粒米不下。(粒米：微小食物) ——趙獻可『医貫』
- 若夫五藏遍傳、雖盧扁亦莫可如何矣。(盧扁：名医) ——『十葉神書』

⑩具体的事物を抽象的事物に代える

- 血氣入藏即死、入府即愈。(藏府：裏表) ——『金匱要略』
- 幾換星霜、始成斯集。(星霜：年月) ——孫志宏

⑪部分を全体に代える

- 五月之時、陽氣在表。十一月之時、陽氣在裏。(五月：夏季、十一月：冬季)
——『傷寒論』弁發汗吐下後病脈并治
- 肺氣通於鼻、和則能知香臭。(香臭：各種気味) ——『中藏經』

⑫結果を原因に代える

- 觀者動色、竟稱華佗再出。(動色：感激) ——喻昌『寓意草』
- 一時紙貴三湘。(紙貴：著作流行) ——『贈万密齋先生書序』

4. 相形 —— 対比的な事物を借りてある事物をきわだたせる

対比的な事物を借りて特に強調したいある事物をきわだたせる修辞方法を相形という。著者の特に強調したい事物がどこにあるかにより、主賓相形、全体相形、言外相形に分けられる。

[1] 主賓相形

対照的な事物（賓）を引き合いに出すことで別のある事物（主）を反するものがある。

①主賓相似

川の水かさが増して船が高く見えるように、対照される主賓に相似性があるもの。

● 觀坡仙楞伽經跋云「經之有難經^(注1)、句句皆理、字字皆法」。亦豈知難經出自內經、而僅得其什一。難經而然、內經可知矣。 ——『類經』序

『難經』を「賓」、『内經』を「主」とし、前者を称賛した言により、さらに後者を強調している。

注1) 蘇軾文集卷66「書楞伽經後」では「醫」に作る。

②主賓相反

水が落ちて岩石がきわだってみえるように、主賓に相反性があるもの。

● 目不舍色、耳不失聲、手不釋脈、猶惧其差也。授藥遂去、而希其十全、不其難哉。

——沈括『良方』序

慎重な診病法（賓）といい加減な治療（主）に相反性がある。

医書ではある病証を記述するときに、弁証の要点を強調するために主賓相反の相形を多用することがある。

● 嘔家本渴、渴者爲欲解。今反不渴、心下有支飲故也。

——『金匱要略』痰飲咳嗽病脈証并治

これは嘔吐病で支飲があるものの記述で、弁証の要点として「渴」（賓）と「不渴」（主）をあげている。

[2] 全体相形

一方の事物を強調する主賓相形に対して、列挙された複数の事物を対等に提示し、その差異を示そうとするものを全体相形という。

●太陽病、小便利者、以飲水多、必心下悸。小便少者、必苦裏急也。

——『傷寒論』弁太陽病脈証并治中

ここでは太陽病が停水部位の相違によって示す「小便利：心下悸」と「小便少：裏急」という双方の弁証の要点と病証を述べている。

●師曰、諸有水者、腰以下腫、當利小便。腰以上腫、當發汗乃愈。

——『金匱要略』水氣病脈証并治

水腫の出現する部位によって、腰以下ならば下法、腰以上は汗法を用いて治療することを対比させている。

[3] 言外相形

性質や意義の相反する事物の外相形という。

●取肝俞與命門^(注1)、使瞽士視秋毫之末、刺少陽與交別^(注2)、俾聾夫聽夏蚋之聲。

——『鍼經標幽賦』

瞽士（盲人）が秋に生え変わった獣の毛の先を見るときは、言外に鍼灸による視力改善効果を讃えており、聾者が夏の蚋の声を聞くとは、やはり鍼灸で聴力障害も治療できるとし、合わせて「耳目聰明」にさせる治療効果を対句の形で謳っているのである。

注1) 高立山等編『針灸心悟』所収の孫震寰『標幽賦淺釈』によると、『靈樞』根結の「命門者、目也」によって命門は睛明穴であるとする。

注2) 同じく少陽は翳風穴、交別とは手少陽の交・内関穴、手少陽の別・外関穴、足少陽の交・蠡溝穴、足少陽の別・光明穴の4穴の総称であるとする。

第4節——変化をもたせる表現

「概説」の「3. 修辞学と古典医籍研究」で紹介した「避復（反復を避ける）や「分承（複数の詞組・分句を一つにまとめた構文）」などは変化をもたせる表現方法である。文章を前後に分けて、前半を上文、後半を下文といい、その上下文を対比したときに変化を生じるような、次の4種の修辞格がある。

1. 上下文の詞句を変える避復
2. 上下文の呼称の範疇・詞序などを変える錯綜
3. 上下文の構造を変える分承
4. 詞句の順序を変える倒装

1. 避復 —— 上下の詞句を変える

上下文に同義の表現が重出するとき、全く同字を用いることは六朝時代の文人から「同字相犯」として厳しく戒められ、それ以来、反復表現を避けることは漢文作法の伝統となった。唐代に出現した近体詩では特殊な効果を目的とする例外を除いて「同字禁」が原則とされた。漢語修辞学ではこれを「避復」という。

避復には表現単位によって詞、詞組、分句を言い換えるものがある。

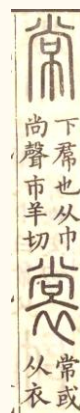
[1] 詞の言い換え

①名詞の言い換え

- 人身非常温也、(…) 人身非衣寒也。(常は裳の本字) —— 『素問』逆調論篇
- 其味有甘苦辛之辨、又有夏菊秋菊冬菊之分。 —— 『本草綱目』菊

②動詞の言い換え

- 工人不能置規而爲圓、去矩而爲方。 —— 『靈樞』逆順肥瘦
- 人吸者隨陰入、呼者因陽出。(因：隨也) —— 『難經』11難



③形容詞の言い換え

- 五色精微象見矣、(…)如是則精衰矣。(微:衰微) ——『素問』脈要精微論篇
- 亡言妄期、此謂失道。(亡は妄に通ず) ——『素問』方盛衰論篇

④代詞の言い換え

- 病在氣、調諸衛、病在肉、調之分肉。 ——『甲乙』6
- 智者察之、衆人味焉。 ——『日日本草』序

⑤副詞の言い換え

- 刺此者、不深弗散、不留不瀉。 ——『甲乙』1
- 閭閻之內、猶有夭枉之哀、朝野之中、尚致膏肓之疾。 ——『千金』

⑥介詞の言い換え

- 易傷以憂、(…)易傷於邪。(以・於:動詞の主動者) ——『靈樞』本藏
- 汗吐宜下之法、止可施諸壯實、豈宜用於胎產。(諸・於:対象を示す)
——傅山『產後篇』

⑦連詞の言い換え

- 氣滑即出疾、其氣瀦則出遲。 ——『靈樞』根結
- 虛而過瀉、實乃更增。(而・乃:順承連詞) ——『中藏經』

⑧助詞の言い換え

- 天之罪與、人之過乎。 ——『靈樞』本藏
- 是平脈邪、將病脈耶。 ——『難經』七難

[2] 詞組の言い換え

- 非大用温散、即過投苦寒、欲病之愈也難矣。 ——『說疫』序
- 草木有蠲癘之力、鍼灸有劫病之功。 ——『明堂灸經』序

[3] 分句の言い換え

- 故知逆與從、正行無間、知標本者、萬舉萬當。 ——『素問』標本病伝論篇
- 瀉虛補實、神去其室、致邪失正、眞不可定。 ——『靈樞』脹論

2. 錯綜 —— 上下の呼称の範疇・詞序などを変える

上下文で同一範疇に属する呼称が用いられるとき、「虫魚飛走（飛走は鳥獸の意）」のように一方を同義でありかつ別範疇に属する代称（この場合は「飛走」）に変える「錯名」、また「迅雷風烈」のように本来同一詞序の上下文の一方を倒錯する（この場合は「迅雷」「錯序」を合わせて「錯綜」という。

[1] 錯名 —— 上下の呼称の範疇を変える

上下文に同一範疇の名詞が対比ないしは列挙されるとき、「虫魚飛走」のように上文に本来の呼称（虫魚）、下文に別範疇の代称（飛走）を挙げるものと、「離左西南」（『標幽賦』）のように上文に本来の呼称（「午」午前十一時～午後一時）に代えて（十二支を方角に当てると午が南に当たることから八卦を方角に当てて南の「離」という）代称を挙げ、下文に本来の呼称（「酉」午後五～七時）を挙げるものがある。

① 上文に本来の呼称を挙げるもの

- 寸脈沈而遲、手足厥逆、下部脈不至。 —— 『傷寒論』厥陰病
- 春夏歸陽爲生、歸秋冬爲死。 —— 『素問』方盛衰論篇

② 下文に本来の呼称を挙げるもの

- 陰病治宜、陽病治府。 —— 『脈經』1 持脈輕重法
- 其脈陽微、關尺小緊。 —— 『脈經』9 平帶下絶産…

[2] 錯序 —— 上下一方の詞序を変える

上下文の一方の詞序を変えるもので「迅雷風烈」の上文「迅雷」のように主語と謂語を倒置するものを「主謂錯序」といい、また「屋發折木」の上文「屋發」のように動詞（述語）と賓語を倒置するものを「述賓錯序」という。それぞれについて下文が倒置するものを「上正下倒」、また上文が倒置するものを「下正上倒」という。

まれに状謂（偏正）錯序および述補錯序が見られることもある。

①主謂錯序 —— 上正下倒

- 脈形如循絲累累然、其面白、脱色。 ——『脈經』1、弁災怪恐怖…
- 肉薄、厚皮、而黑色。 ——『甲乙』5、鍼道自然逆順

②主謂錯序 —— 下正上倒

- 正月陽氣出在上而陰氣盛、陽未得自次、腫腰、脰痛。 ——『素問』脈解
- 短氣、心痺、悲怒逆氣、怒狂易、魚際主之。 ——『甲乙』9

③述賓錯序 —— 上正下倒

- 刺鍼必肅、刺腫搖鍼、經刺勿搖、此刺之道也。 ——『素問』鍼要經終論篇
- 癩疾、吐舌、沫出、羊鳴戾頸、天井主之。 ——『甲乙』11

④述賓錯序 —— 下正上倒

- 無大熱、其人燥煩者、此爲陽去、入陰故也。 ——『傷寒論』少陽病
- 洩便、遺矢、狂言、(…)此爲腎絕也。(洩：泄)(注1) ——『傷寒論』弁脈

⑤状謂錯序

- 徐至即後三年、至甚即首三年。 ——『素問』刺法論篇

⑥述補錯序

- 牛膝(…)逐血氣、傷熱火爛。 ——『神農本草』

注1)『漢語大詞典』第5卷水部「洩」より：同「泄」。②排泄。おなじく「泄」より：②排出(液体、気体)。特指排水的渠道。③腹瀉、水瀉。同第1卷人部「便」より：⑩泌尿。亦謂排泄泌尿。『中医文言修辭』は『張氏医通』より「前後洩便俱有血」を引き「“前洩”和“後便”」とする。

3. 分承 —— 上下の構造を変える

たとえば「耳目聰明」のように元来独立した2つの詞組あるいは分句であった上下文

(耳聰、目明)を見かけ上一つである句子に合成した場合、上文の数語(この場合は「耳・目」)を下文の数語(同じく「聰・明」)が元来の同詞組・分句の組合せで「分けて承ける」ことからこの種の修辭格を「分承」という。

分承には元来の詞組・分句が2個である「簡單分承」とそれが3個以上である「複雑分承」がある。

[1] 簡單分承 —— 元來2個の詞組・分句であるもの

「耳 A1目 A2聰 B1明 B2」のように上下文の数語とそれを分承する下文の数語の詞序が「耳 A1聰 B1、目 A2明 B2」と変わらないものを「順承」といい、これに対して「頭 A1項 A2強 B2痛 B1」のように分承するときに「頭 A1痛 B1、項 A2強 B2」と下文を倒置して承けるものを「錯承」という。

①順承 A1 A2 B1 B2 → A1 B1+A2 B2

- 隨瘡勢之大小、灸艾壯之多少。 —— 『外科正宗』
- 深嘆纏鎖於名利者之莫能脱也。 —— 鄭寧『藥注要略大全』序
- 止水鑿形、洪鐘答響、顧安所逃脫其形聲哉。 —— 『証類本草』序

第一例：→ 隨瘡勢之大、灸艾壯之多。隨瘡勢之小、灸艾壯之少。

第二例：→ 纏於名、鎖於利。(成語「名纏利鎖」による)

第三例：→ 止水鑿形、顧安所逃脫其形哉。洪鐘答響、顧安所逃脫其聲哉。

「止水鑿形」は『莊子』徳充符の「人莫鑑於流水、而鑑於止水」による。「洪鐘」の洪は大で、大鐘のこと、後漢・張衡『東京賦』に「撞洪鍾」。

鐘と鯨

『東京賦』にまた「發鯨魚、鏗華鍾」、『太平御覽』引く薛綜注「海中大魚名鯨、海島中又有大獸、名蒲牢、畏鯨魚。鯨魚一擊、蒲牢輒大鳴呼。凡鍾欲令大鳴、故作蒲牢於上、所以擊之者鯨魚、有篆刻文故曰華鍾也。」

②錯承 A1 A2 B1 B2 → A1 B2+A2 B1

- 勞則喘息汗出、外内皆越、故氣耗矣。 —— 『素問』舉痛論篇

●此回陽倒陰之理、補瀉盛衰之功。——『通玄指要賦』

●徐察其呼吸之進退。——張介賓『景岳全書』

●惟以病之輕重而增損之。——徐春甫『古今醫統大全』

第一例：→ 喘息則内越、汗出則外越。

第二例：→ 補衰（虚）、瀉盛。（述賓、述賓）

第三例：→ 呼之退、吸之進。（氣を吐けば体を退き、吸えば進入する）

第四例：→ 惟以病之輕而損之、惟以病之重而增之。

[2] 複雑分承 —— 3層構成の分承

3層構成からなるいわゆる複雑分承は、第1・2層と第2・3層の間にそれぞれ分承を行い、2回の分承の同異によって「相同分承」と「相違分承」に分けられる。

①相同分承（双順承、双錯承）

●此君子春夏養陽、秋冬養陰、順天地之剛柔也。——『傷寒論』傷寒例

春夏養陽、秋冬養陰（1層）＋天地（2層）＋剛柔（3層）となっている。

→春夏養陽、順天之剛也。秋冬養陰、順地之柔也。

●治有逆從者、以病有微甚者、以證有真假也。——張介賓『類經』

逆從（1層）、微甚（2層）、真假（3層）。証候と本質が一致していれば証は真、病は微（軽い）、治は逆（正）を用いる。証候と本質が一致していなければ証は仮、病は甚（重い）、治は從（反）を用いる。

→證真則病微、病微則逆治。證假則病甚、病甚則從治。

以上2例いずれも双順承である。

A1 A2、B1 B2、C1 C2 → A1 B1 C1 + A2 B2 C2

●以前後分浮脈之陰陽、而定表裏、此仲景之創論也。——徐忠可『金匱要略論注』

前後（1層）、陰陽（2層）、表裏（3層）。『金匱要略』臟腑經絡先後病脈証第一の「師曰、病人脈浮者在表、其病在表、浮者在後、其病在裏」を注釈したもので、「前（寸部）後（尺部）」と「陰（尺脈の性）陽（寸脈の性）」は錯承し、また「陰陽」と「表（寸脈で診

る) 裏 (尺脈で診る) も錯承している双錯承である。

→以前分浮脈之陽而定表、以後分浮脈之陰而定裏。

A1 A2、B1 B2、C1 C2 → A1 B2 C1 + A2 B1 C2

②相違分承： 1・2層間と2・3層間の分承の種類が異なるもの

●故本輸者、皆因其氣之虛實、疾徐以取之、是謂因衝而寫、因衰而補。

——『靈樞』邪客

虚実 (1層)、疾徐 (2層)、因衝而寫因衰而補 (3層)。1層から2層へは錯承、2層から3層へは順承されている。「本輸」は文中で少陰の月兪を指し、「疾徐」は手技の速いと遅いと、「取」は鍼刺、「衝」は盛んな貌である。

→因其氣之虚、徐以取之、是謂因衰而補。因其氣之實、疾以取之、是謂因衝而寫。

A1 A2、B1 B2、C1 C2 → A1 B2 C2 + A2 B1 C1

相違分承にはこの例のように1層から2層に錯承、2層から3層に順承するもの、また1層から2層に順承、2層から3層に錯承するものがある。

第5節——簡略した表現

「省略」「举隅」「互備」の3種の修辞方法は、いずれも原文の一部を削りながらもいわんとする意味が伝わるように簡略した表現方法である。

ある清朝の学者によると文章には「八簡」があるという (『劉海峰文集』論文偶記)。

- 一、文筆老 (文筆力が老練) なればすなわち簡
- 二、意真 (文意が真実) なればすなわち簡
- 三、辞切 (文辞が切実) なればすなわち簡
- 四、理当 (文理が正当) なればすなわち簡
- 五、味淡 (文味が淡泊) なればすなわち簡
- 六、氣蘊 (語気が含蓄) なればすなわち簡

七、品 貴 (品格が高貴) なればすなわち簡

八、神遠にして含蔵不尽 (文章精神が深遠無限) なればすなわち簡

そして理想とするのは韓愈、欧陽脩の文章とされるが、ここまで「簡」を尊ぶ気風が細やかな簡略表現を生み出したものであろうか。

[1] 省略

省略には簡称 (名称の略)、帶過 (例を挙げ「其他如此」等に略す)、対話 (反復する対話者や「曰」の略)、疏略 (懐妊→懐など)、意合 (接続・反問の語気含む)、跳脱 (「不然」の略)、^{しかざれば}包含 (悪寒発熱→外証など) といった句の形式にかかわらない種々の簡略表現がある。

①簡称： 名称を簡略化する

【人名】軒岐有靈素經。(軒岐は黄帝と岐伯) ——『類經』葉秉敬序

苟操敬慎心、何必求扁倉。(扁倉は扁鵲と倉公) ——方孝孺

簡按、朱子論語注云「凡君問、皆稱孔子對曰者、尊君也」。(簡は多紀元簡)

——多紀元簡『素問識』

【書名】『難經』——『黄帝八十一難經』

『金匱』——『金匱要略方論』

『甲乙』——『黄帝三部鍼灸甲乙經』

『千金』——『備急千金要方』

【穴名】二陵二躄二交、似續而交五大、兩間兩商兩井、相依而別兩支。

(二陵：陽陵泉・陰陵泉、二躄：陰躄・陽躄、二交：陰交・陽交、五大：五体、

兩間：二間・三間、兩商：少商・商陽、兩井：天井・肩井、兩支：左右上肢)

——『鍼經指南標幽賦』

②帶過： 本段、他段、他篇の例を挙げ「如此」等と他を略す

●氣虚者、肺虚也。氣逆者、足寒也。非其時則生、當其時則死。餘藏皆如此。

(本段の例) ——『素問』通標虚実論篇

●立夏脈洪大、是其時脈、故使然也。四時仿此。 ——『傷寒論』弁脈法

●其少長大小肥瘦、以心撩、命曰法天之常。灸之亦然。 ——『靈樞』經水

●足之陽明、手之太陽(…) 治皆如右法也。(他段の例) ——『靈樞』經筋

●口乾苦渴、小便黃目下腫、腹中鳴、身重難以行(…)病名曰風水、論在刺法中。

(他篇、刺法は『素問』の亡佚篇名) —— 『素問』評熱病論篇

③對話： 対話文で反復する登場者名や「曰」の略

●黄帝曰：人之自嚙舌者、何氣使然。

(岐伯對曰：) 此厥逆走上、脈氣羣至。少陰氣至則嚙舌。 —— 『靈樞』口問

●問曰：陽病十八、何謂也。

師曰：頭痛、項・腰・脊・臂・脚掣痛。

(問曰：) 陰病十八、何謂也。

師曰：咳、上氣、喘、咽、腸鳴、脹滿、心痛、拘急。

—— 『金匱要略』臟腑經絡先後病脈証第1

④疏略： 全体の理解に影響のない部分の略

●肝痺者、夜臥則驚、多飲、數小便、上爲引如懷。(引：引小便)(懷：懷妊)

—— 『素問』痺論篇

●因而強力、腎氣乃傷、高骨乃壞。(強力：強力入房)(高骨：腰間脊骨)

—— 『素問』生氣通天論篇

●無實無虛、損不足而益有餘、是謂甚病。(實：實實)(虛：虛虛)

—— 『靈樞』九針十二原

●反其目視之、其中有赤脈上下貫瞳子。(上下：從上而下) —— 『靈樞』寒熱

⑤意合： 上下文の間や句末の言外に連接や反問の語気を隱含する

上下文の間に連接の語気を隱含する

【順承】過肉中筋、過筋中骨。 —— 『素問』刺齊論篇

寒傷形、熱傷氣、氣傷痛、形傷腫。 —— 『素問』陰陽応象大論篇

【轉折】夫仲景、法之祖也。後人雖移易無窮、終莫能越其矩度。

(移易：改變)(矩度：弁証法) —— 『医經溯洄集』張仲景傷寒立法考

【仮設】一毫有疑、則考校以求驗。 —— 『脈經』序

脾不及化、則未有不病者。 —— 『類經』17、胎孕

【讓歩】有所召必往、寒暑雨雪不避也。——『証類本草』跋

此業終吾之身、施亦有限。——『外科正宗』

【選択】亦不知其補之之力、攻之之力。——『景岳全書』

石膏之設、爲治風歟、治寒歟。——『傷寒論翼』

句末に反問の語気を隠含する

●春傷於風、夏必飧泄、夏傷於暑、秋必病瘧、(…)此必然之道、可不審明之。

——『傷寒論』傷寒例

●太陽病、當惡寒發熱、今自汗出反不惡寒發熱關上脈細數者、以醫吐之過也。(…)

此爲小逆^(注1)。——『傷寒論』太陽病脈証治

注1)「此爲小逆」喜多村直寛『傷寒論疏義』に「今者病在表、固無吐之之理、而誤治爲上項諸變證、此豈爲小逆乎。蓋古文簡潔、故有此等句法。諸家隨文順釋、嚼然味臘矣」とある。

⑥跳脱： 上下文の間に「不然、否則（しかざれば）」を意味する字句の略

●微似有汗者益佳。不可令如水流離、病必不除。——『傷寒論』桂枝湯方論

●馬肉不可熟食、傷人心。——『金匱』禽獸魚虫禁忌并治

●神庭(…)禁不可刺、令人癩疾、目失精。——『甲乙』3

●香薷(…)性温、不可熱飲、反致吐逆。——『本草綱目』

●小兒一期之内(…)不可裹足覆頂、致陽氣不出、多發熱。

——『針灸大成』10、初生調護

⑦包含： 条文の短い語録形式の文体で詳細な症候記述を略す

【証因方略】夫短氣微飲、當從小便去之、苓桂朮甘湯主之、腎氣丸亦主之。

——『金匱』痰飲咳嗽病脈証并治

本条の2方は通利小便作用があり、短氣微飲を治すが、苓桂朮甘湯は益脾土の功があり、その証は脾土不健を包含する。また腎氣丸は養陽気の效があり、その証は腎陽衰微を包含している。

【証因病略】太陽病、發熱無汗、反惡寒者、名曰剛瘧。太陽病、發熱汗出、而不惡寒、名曰柔瘧。——『金匱』瘧濕・病脈證并治

瘧病の証は「身熱足寒、頸項強急、惡寒、時頭熱、面赤、獨頭動搖、卒口噤、背反張」などを包含するが、本条は其中で、剛柔の弁証点を示している。

【証因脈略】太陽病、外證未解、脈浮弱者、當以汗解、宜桂枝湯。

——『傷寒論』弁太陽病脈証并治

「外証未解」であれば惡寒、發熱、頭痛などがあるが、さらに「脈浮弱」であれば表虚であるから「自汗」の証が包含され、すなわち桂枝湯の適応となる。

【証因証略】下利譫語者、有燥屎也。小承氣湯主之。——『金匱』嘔吐、下利病脈証并治

『傷寒論』弁陽明病脈証并治に「実則譫語、虚則鄭声（注1）。鄭声者、重語也。直視譫語、喘滿者死、下利者亦死」とある。譫語は陽明府実の主要症候であるから、腹部脹滿、潮熱、舌苔氣燥、小便黄赤などの陽明府実の証を包含している。

注1) 多紀元簡「鄭声」に「鄭聲、重語也。義未明晰。田藝✓『留青日札』云、鄭聲淫、今考鄭詩非淫、鄭聲則淫。淫者、聲之過也。猶雨之過者曰淫雨、水之過者曰淫水、故溢也」。

また伊藤馨『傷寒論文字攷』に「鄭・衛之樂、煩手、淫聲、過其常度。故引伸之凡煩煩之聲、重迭之語、總謂之鄭聲也。論語曰、鄭聲淫、佞人殆。（…）論中鄭聲者、言重迭煩煩、言語殷勤也」。

また森立之『傷寒論攷注』に「謂鄭聲之鄭爲鄭重之義」。

[2] 拳隅

拳隅という語は『論語』述而の「舉一隅而示之（一隅を挙げて之に示す）」という一節に出る割裂で、教える者が一端を挙げて例とし、この一端によって人にその他を推して知らしめるという意味である。

清末の医家・唐大烈が江蘇・浙江の医家四十余名の文章約百編を編纂した『吳医彙講』（1792～1801年刊）は医論・驗方・考証などを包括する医学刊行物の先駆として知られるが、その中に「読書十則」という一文があり、その中の一則を「読書必須隅反（読書には必ず須く隅反すべし）」とする。隅反という語は『論語』の前出の一節に続く「不以三隅反、則不復也（三隅を以て反せざれば、則ち復せざる也）」という一節の「以三隅反」に出

る割裂で、学ぶ者がその他を推して知るという意味である。

段逸山『中医文言修辞』は医書中の実例を根拠に挙隅を3類に分ける。

①**舉此賅彼**（此を挙げて彼を賅す）

この一義を挙げて彼の相関の義を賅（包括）するという意味である。「礼・義」のように相関した意味で、普通は列挙される語の一方のみを挙げて他を包括させる方法である。

（傍線部は挙隅）

●**人右耳目、不如左明也。** ——『素問』陰陽応象大論篇

「左」は「左耳目」を指す。「耳目聰明」は「耳聡、目明」の分承であったから、「明」は「聡」を賅している。

●**寒則地凍水冰、人氣在中、(…) 當是之時、善行水者、不能往水、善穿地者、不能鑿、善用針者、亦不能取四厥、(…) 故行水者必待天温。** ——『靈樞』刺節真邪

「必ず天温を待つ」のは「行水者」だけではなく、「穿地者」「用針者」も賅されており、天温が解凍、解氷するように厥を治するには熨法を用いて火気が血脈に通じるのを待ってから鍼を用いるという意味である。

②**舉此見彼**（此を挙げて彼を見わす）

この一義を挙げて彼の暗伏された義を見わすという意味である。「黄は地の色なり」という文から「玄は天の色なり」を類推するように、上下文の一方にのみ挙げた語から他方に暗伏された相関の意味を見出さなければならない。

●**徐疾之意、所取之處、寫必用員、切而轉之、其氣乃行、疾而徐出、邪氣乃出。**

——『靈樞』官能

用鍼の補瀉で、鍼の出入の徐疾を使い分ける説明で、瀉は天に則る動的な「員（圓）」法で、補は地に則る静的な「方」法で行う。下文の「徐出」から上文の「疾（入）」を類推しなければならない。

●**病者腹滿、按之不痛爲虚、痛者爲實、可下之。** ——『金匱要略』腹滿寒疝宿食病脈証治

腹満病を虚実弁証しており、実証に対する治法として挙げられる「可下之」から上文の虚証に対する治法「不可下之」を見出さなければならない。

●**窮其病矣、外病療内、上病救下。** ——『褚氏遺書』

『素問』五常政大論篇に「病在上、取之下、病在下、取之上」とあるように、「外病療内」から言外の「内病療外」を、また「上病救下」から言外の「下病救上」を類推しなければならない。

③**舉偏概全**（^{かたはし}偏を挙げて^{はか}全てを概る）

一組の同類の語群の中から偏例を挙げて全語群を概括する方法で、「鹹、北方味也」と挙げて他の四味の方角を概括するようなものである。

●**温瘧者、得之冬中風寒。氣藏於骨髓之中、至春則陽氣大發、邪氣不能自出。(…)**

此病藏於腎、其氣先從内出、之外也。如是者、陰虚而陽盛、陽盛則熱矣。

——『素問』瘧論篇

先に挙げた「読書十則」では「王肯堂の言うには冬令の寒が腎に蔵するのであれば、春夏秋の令気がそれぞれ所属の蔵に入って客さないということがあろうか。これは一を挙げて三隅を反するものである、と。烈（唐大烈=私）案ずるに、『素問』ではただ冬令の寒を挙げたものを、肯堂は推して春夏秋令の邪に及ぼそうというのである。読書は隅反を貴ぶのを見るべきであり、一説に固執してはならないのである」とする。

このように経文を舉偏概全とみなし、隅反の方法を用いて解釈を下そうとする注釈者は医書においても少なくない。

●**心熱病者、先不樂、數日乃熱。** ——『素問』刺熱論篇

張志聡（1610～1674?）『素問集注』は「心志は喜に在りて、恐これに勝つ。先ず樂しまざれば恐に傷らる。それ心は君主の官（蔵）たり、蔵熱すれば乃ち神志の病む、故に独り心蔵を挙げて以て五蔵の熱、乃ち五志の病を為すことを申明す」とする。五蔵ともに熱によって情志を病むという指摘であり、申明とはまた隅反のことである。

●夫四時陰陽者、萬物之根本也。所以聖人春夏養陽、秋冬養陰、以從其根、故與萬物浮沈於生長之門。 ——『素問』四氣調神大論篇

馬蒔『素問注証發微』（1586年刊）は「生長と言えるは収蔵をも概せり」として、「生長之門」が「生長収蔵之門」の挙隅であることを指摘している。

[3] 互備

漢文の表現には字面で上下文に別々に書かれたものを、意味の上から合わせて読み取らなければならないことがしばしばある。

●秦時明月漢時關 萬里長征人未還

但使龍城飛將在 不教胡馬度陰山 ——唐・王昌齡「出塞」

長城を修築して匈奴を御ぐのは秦・漢に継続した歴史的事実であり、したがって明月が関塞を照らすのはひとつの歴史風景の回顧であるから、秦の明月、漢の関に分けられるものではない。

このような表現の起源は経伝の成立とともに古い。

●天子玉藻、(…)以日視朝、遂以食、日中而餽。

諸侯玄冕、(…)又朝服以食、特牲三俎、祭肺、夕深衣、祭牢肉。 ——『礼記』玉藻

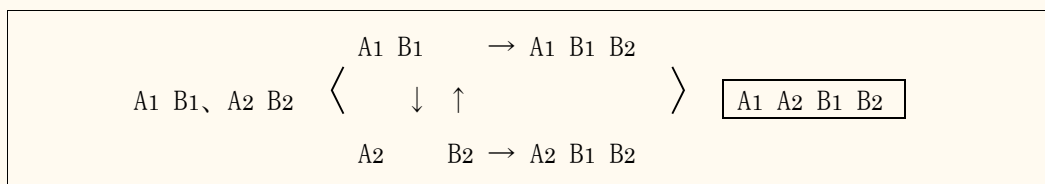
「経学大師」と称される後漢・鄭玄（127～200）はその注に「天子に日中と言ひ、諸侯に夕と言ひ、天子に餽しゅんと言ひ、諸侯に牢肉を祭ると言ひは互いに相挟む」と記す。天子は「日中にして餽す」、昼に廟の供え物の下がり^{しゅん}を食すといひ、諸侯は「夕に深衣（日常着）で牢肉（犠牲の家畜の肉）を祭る」とあるのは天子も諸侯もそれぞれ昼は廟の供え物の下がり^{しゅん}を食し、夜は犠牲の家畜の肉を食すという意味である。

唐・賈公彦『儀礼義疏』に「凡そ互文と言へる者は、是れ両者各々一辺を挙げて省く、故に互文という」といふ。上下文より各々一語を挙げてその義は相互に具備しているというもので、鄭玄注の「互相挟」はこのことにほかならず、修辞学では互備といひ、正言互備と反言互備がある。

①正言互備

上文と下文が各々一語ずつを挙げ、同時に相互の挙げた語をそのまま具備して意味

するもの。次のような帰納格式で表される。

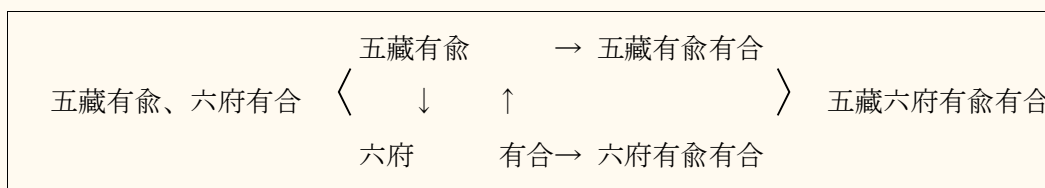


1と2は上文と下文を、矢印↑↓はそのまま上下文間で相互に具備されることを示している。枠線□内が帰納された互備内容部分である。

● 五蔵有愈、六府有合、循脈之分、各有所發、各隨其過、則病廖也。

——『素問』痺病論篇

この下線部分を上の帰納格式にあてはめてみる。



最後の「五蔵六府有愈有合」が帰納結果の互備内容部分である。

● 鍼石之敗、毒藥所宜。 ——『素問』示從容論篇

これも前例と同様に帰納してその互備内容が「鍼石・毒藥之敗・所宜」であることがわかる。

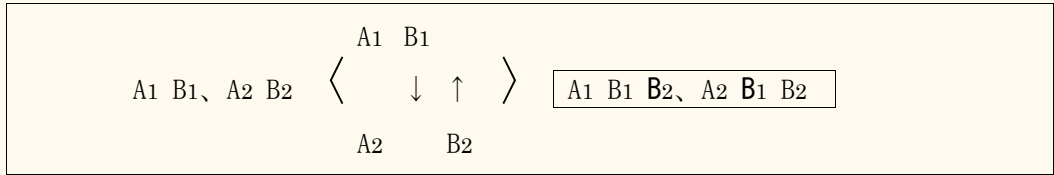
● 男子失精、女子夢交、桂枝龍骨牡蠣湯主之。 ——『金匱要略』血痺虛勞病脈証并治

これも帰納結果の互備内容「男子・女子、失精・夢交」が本方の主治証である。

②反言互備

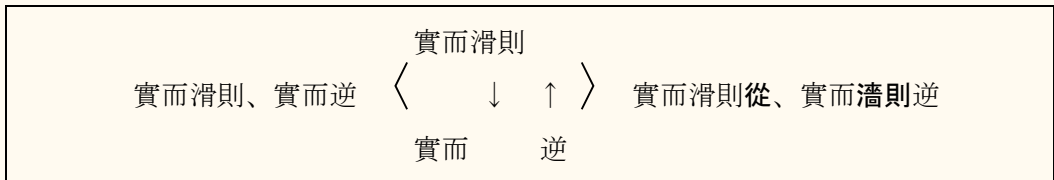
上文と下文が各々一語ずつを挙げ、同時に相互の挙げた語と相反する義を具備するもの。帰納格式は次のように表される。

矢印↑↓およびゴシック体は相互の挙げた語と相反する義が互備されることを示し、その帰納結果が正言互備と異なることに注意されたい。



● 實而滑則生、實而逆則死。 ——『素問』通評虛実論篇

この例文を下の帰納格式にあてはめてみる。



王冰注に「逆は濇を謂う」とあるが、新校正注は「詳しくは王氏の逆を以て濇と為すは大いに非なり。古文は簡略にして辞 多く互文をす。上に滑を言いて下に逆というのは、滑を挙げれば則ち從の知る可く、逆と言えは則ち濇の見る可し。逆は濇為りと謂うには非ず」とする。

● 堅者不入、脆者皮弛。 ——『靈樞』五變

同様に帰納の結果得られる互備の内容は「堅者皮緊不入、脆者皮弛易入」ということになる。

王昌齡「出塞」の「龍城飛將」について

清・陳婉俊補注『唐詩三百首』は「『史記』衛青伝に元光五年、青、車騎將軍となり、匈奴を撃ちて上谷に出、龍城に至る。(…)『漢書』李廣伝に猿臂善く射、髪を結んで征に従う、大小七十余戦、人の敢えて敵うもの莫し。上(帝)は廣に北平太守を拜す。匈奴号して漢の飛將軍と曰いてこれを避け、数歳敢えて界に入らず。按ずるに龍城、飛將は蓋し二事、此に之を合わすは誤りなり」とする。さらに中国社会科学院『唐詩選』(1978年)は宋刊本王安石『唐百家詩選』によって龍城を盧城と改める。李廣が太守となった北平は唐に北平郡となり、盧龍県を治し、また盧龍府、盧龍軍があったという。おそらく盧城の飛將は李廣のことであろう。

第6節——均整の取れた表現

「対偶」「排比」「複用」の3種の修辞格はいずれも均整をめざした表現と言える。「対偶」は「天長、地久」(『老子』7章)のように対照的な語文構造を用いて相関的な内容を表現し、「排比」は「醫貴乎精、學貴乎博…治貴乎巧、效貴乎捷」(『医門補要』序)のような同一句式の連用で語気を強調し、「複用」は「營衛」、「脾胃」のような関連詞語の連用によって句詞のリズムを調えるものである。

[1] 対偶

対偶をなす条件は上下文の字数が等しいこと、そして語文構造が同じか相似の語句を用いて相関的な内容を表現していることである。対偶をなすことで字句は見た目に均整がとれて耳に響きがよく、読みやすく記憶しやすい(易読易記)ため古今漢語中に広汎に見られる。

『老子』の「功成、事遂」(17章)は2字対で主謂結構、「和其光、同其塵」(56章)は3字対で述賓結構、「知者不言、言者不知」(同)は4字対で主謂結構であり、いずれも字数と語文構造が上下文で対応していることがわかる。

このほかにも音韻の対偶があり、平字(平声)と仄字(上・去・入声)が対応するもので詩・賦など韻文では厳密に守られるが、これは医書ではそれほど厳密ではない。杜甫「春望」の冒頭の2聯を見よう。

● 國破山河在 城春草木深 (春・深は動詞で春がくる、深くなる)

感時花濺淚 恨別鳥驚心 (花・鳥は原因の状語)

対偶には「正対」「反対」「串対(流水対)」の3種類があり、また句数によってそれぞれ単句対と複句対がある。また1句中の詞語が対偶をなすものを「当句対(句中対)」という。

①正対： 上文と下文の意義が似ているもの

単句対：用藥如用兵、用醫如用將。——『褚氏遺書』除疾

複句対：倉稟不藏者、是門戶不要也。

水泉不止者、是膀胱不藏也。——『素問』脈要精微論篇

「倉粟不藏」は大便秘、 「門戸不要」は腎不、 「水泉」は小便の意。

● 謂沈爲伏、則方治永乖。

以緩爲遲、則危殆立至。 — 『脈經』序

② 反対： 上下文の意義が相反するもの

当句対： 華其外而、悴其内。 — 『傷寒論』序

単句対： 崇飾其末、忽棄其本。(忽：軽視) — 『傷寒論』

複句対： 智者之舉措也、常審以慎。(審：定(副詞))

愚者之動作也、必果而速。 — 『傷寒論』・傷寒例

「舉措」「動作」は動詞で、「之」が分句を表す結構助詞。

● 第人謂其難、謂其難辨也。「第」は只是

余謂其易、謂其易治也。 — 『景岳全書』総論

③ 串対(流水対)： 上下文の意義相承するもの

杜甫「登岳陽樓」の首聯が名高い。

● 昔聞洞庭水 今登嶽陽樓 (岳陽樓は洞庭湖の東岸にある)

単句対： 卒然遭邪風之氣、嬰非常之疾。(嬰：遇・触) — 『傷寒論』序

複句対： 致瑰奇之士拂衣而去、(致：招引)(瑰奇：珍貴)

使深危之病坐而待亡。 — 『医宗必読』不失人情論

「瑰奇之士」は高明の医、「払衣」は怒る様子、「去」は席を去ること。「深危之病」は重病人の借代であることが対偶形式によってわかる。対偶の上下文を照合することで解釈を明確にできる例である。

[2] 排比

排比は字数が大体同じで結構相同、意義相関の詞組あるいは句子をいくつか連用するもので、句中排比・単句排比・複句排比がある。

● 故其疾如風、其徐如林、侵掠如火、不動如山。

この『孫子』軍争篇の有名な一文では「～～如～」という句法で一貫した、「兵（軍隊の意）」を共通の主語とする4分句の排比で緩急自在な用兵の原則を表現している。

医書では証候表現、脈象の相違、方剤の効能、治療方法、病人の差異、気血の効用、疾患の変化などの意義相関する事物を比較してその特徴を明確にするために多くの排比が用いられている。

①単句排比： 排比句が単句であるもの

- 凡相五色之奇脈、面黃目青、面黃目赤、面黃目白、面黃目黒者、皆不死也。面青目赤、面赤目白、面青目黒、面黒目白、面赤目青皆死也。

——『素問』五藏生成論篇

「面～目～」の4字で一貫しており、4分句の「皆不死也」を共通の謂語とする組と5分句の「皆死也」を謂語とする組の2組の排比からなる。

- 陰陽者、天地之道也、萬物之綱紀、變化之父母、生殺之本始、神明之府也。

——『素問』陰陽応象大論篇

「～～之～～」の5字で一貫し、主語「陰陽」を同じくする並列の5分句の排比からなる。

- 故人臥、血歸於肝、肝受血而能視、足受血而能歩、掌受血而能握、指受血而能攝。

——『素問』五藏生成論篇

「～受血而能～」の6字で一貫した並列の4分句の排比。

- 然病者一身、血氣有淺深、體段有上下、藏府有内外、時月有久近、形志有苦樂、資稟有厚薄、能毒有可否、標本有先後、年有老弱。（体段：身体）

——朱震亨『局方發揮』

「病者一身」を受けて「～有～～」の4～5字で一貫した9分句の排比。

②複句排比

構構が近似で語気が相同した複合句同士が配列されるもので、形式・内容ともに単句

排比に比べて複雑となる。

●上部天兩額之動脈、上部地兩頰之動脈、上部人耳前之動脈。

中部天手太陰也、中部地手陽明也、中部人手少陰也。

下部天足厥陰也、下部地足少陰也、下部人足太陰也。——『素問』三部九候論篇

「～部天～～、～部地～～、～部人～～」の並列の3分句による3つの並列複句からなる排比。上中下の三部における九候の部位を示す。

●使能明醫理之綱目、則治平之道如斯而已。

能明醫理之得失、則興亡之機如斯而已。

能明醫理之緩急、則戰守之法如斯而已。

能明醫理之趨舍、則出處之義如斯而已。——『景岳全書』医非小道記

仮設の「使」を共通にした前分句「能明醫理之～～」と結果分句「則～～之～如斯而已」による4つの偏正複句からなる排比。「趨舍」は進取と遺棄、「出處」は出仕と隠退の意味。

●自人蕩眞於情竇也、而眞者危。(蕩：尽)(竇：水流)

喪志於外華也、而醇者漓。(醇：厚)(漓：薄)

眩心於物牽也、而萃者渙。(萃：集)(渙：散)

汨情於食色也、而完者缺。(汨：沈)

勞神於形役也、而堅者瑕。(瑕：傷)——『針灸大成』卷4 針有深淺策

仮設の前分句「～～於～～也」と結果分句「而～者～」による5つの偏正複句からなる排比。全体で情志・心神の耗傷をもたらす原因を説明する。

[3] 複用

複用は意味が相同・相反もしくは相類する詞語を連用して一つの意味を表現する。語気を緩め音節を調和する働きがあり、詞語相互の意義関係から同義複用(長久など)・反義複用(緩急など)・類義複用(眉目など)の3種に分けられている。

①同義複用： 同義の詞語を連用するもの

その多くは同義詞複用であり、同義詞複用には以下の4つの特性がある。

1. 詞性相同： 複用される同義詞は必ず同じ詞類に属している。
2. 臨時的結合： 同義詞複用には以下の3点の臨時的結合の特性がある。
 - ・ 詞序が倒置できる（論議—議論）
 - ・ 1字ずつ単用される（法則天地—法天、則地）
 - ・ 結合が自由である（象若・象似・如似）
3. 同義を存して異義を用いない：

「一巫覡」の巫は女で覡は男のシャーマンを意味するがこれは一人のシャーマンの意味。

4. 新詞を構成する：

- 舉世昏迷、莫能覺悟。 ——『傷寒論』序
- 其知道者、法於陰陽、和於術數。 ——『素問』上古天真論篇
- 刺厥陰之脈、在臑踵魚腹之外、循之累累然、乃刺之。 ——『素問』刺腰痛論篇
（風府）…督脈・陽維之會、禁不可灸。 ——『甲乙』3—1
- 設令脈自和、處言此病大重、當須服吐下藥、鍼灸數十百處、乃癒。（處言は告）
——（『傷寒論』平脈法）
- 自欲吐、至五六日自利、復煩燥、不得臥寐者、死。 ——『傷寒論』少陰病
- 大過者、爲陽絕於裏、亡津液、大便因硬也。 ——『傷寒論』陽明病
- 男子脈微弱而濇、爲無子、精氣清冷。 ——『脈經』8—6

②反義複用： 反義の詞語を連用するもの

その一方が実際上の意味を有し、他方は意味を成さない。詞法学上で偏義複詞と呼ばれるもので「一朝緩急、便易本心、吾不能也（一朝緩急あり、便わち本心を易うるは、吾能くせざるなり）」（『資治通鑑』）の「緩急」は急の意味であり、また「不宜異同（宜しく異同あるべからず）」（諸葛亮『出師表』）の「異同」は異の意味である。反義複用の多くは一字が正、一字が負の互いに反面の義であるとき、負の意味を有する。

- 脈有逆從、四時未有藏形、春夏而脈瘦、秋冬而脈浮大、命曰逆四時也。

（段逸山「逆從偏義為逆」）——『素問』平人氣象論篇

錢超塵『內經語言研究』は『素問』中出現の「逆從」は上古天真論篇「逆從陰陽」が從の偏義である以外、すべて「逆と從」の意味とし、ここは「逆從四時」と句読する（また運氣篇で多く「逆順」に作るのは同篇が梁の諱字「順」を避けないからという）。

●所謂腰痛不可以俛仰者、三月一振榮華、而萬物一俛而不仰也。

(段逸山「榮華：指草木開花。一俯之一：皆」) ——『素問』脈解篇
『太素』8、經脈病解の楊上善注に「振、動也。三月、三陽合動而爲春。萬物榮華、低枝垂葉、俛而不仰、故邪因客厥陰、腰痛、俛不仰也」とする。なぜ三月の草木が「俛而不仰」なのか、そしてなぜ「腰痛」に通じるのか、森立之『攷注』案語に「然猶枝朶柔脆、有俛而無仰。是陽氣雖浮于上、陰氣猶盛于内、故帶濕氣而垂下。人身帶濕邪、亦有似此也。凡花葉草芽之類、初出時、必低頭而長、皆與此同。少陽多陰之理也」とする。

●咳家、其脈弦、欲行吐藥、當相人強弱而無熱、乃可吐之。

(段「相：察看。強弱：強也」) ——『脈經』8—15

●壬戌歲、許敬菴公患腰痛之甚、…診其脈、尺部沈數有力、然男子固宜沈實、但帶數有力、是濕熱所致、有餘之疾也。醫作不足、治之、則非矣。性畏鍼、遂以手指於腎俞穴、行補寫之法、痛稍減。

(段「有餘：指邪氣有餘。不足：指正氣不足」) ——『鍼灸大成』11医案

●脈者、指下之經綸也。斯而或昧、輕則係病之安危、重則關人之生死、誠不可不語者。(段「經綸：指才幹。而或：如果」) ——吳昆『脈語』序

才幹は才能。また「生死」について錢『研究』は『素問』中多くの「死生」が死の義であることを『素問』の用語習慣であると指摘する。

●(例) 瞳子高者、太陽不足、戴眼者太陽已絶、此決死生之要、不可不察也。

(錢「此《死生》亦偏義複詞、指《死》而言」) ——『素問』三部九候論篇

●嘗見人臀股間受箭傷者、未必即死、此之利害不過如是。 ——『景岳全書』47癰贅

③類義複用： 同類の詞語を複用するもの

甲を説くために類義の乙に連帯して及ぶので「連及」ともいった。このうち反義複用を「反連」、類義複用を「類連」という。「鄭、伯男也」(『春秋左氏伝』)といえは鄭国は伯爵国なので公侯爵国ではなく、伯男爵に属するという意味である。現代漢語でも俗語で弟を指して「兄弟」ということがある(発音は xiongdì)。

●營衛稽留于經脈之中、則血泣而不行、不行則衛氣從之而不通。(段「營衛：義偏于營。稽留：留止。泣：通澀、血行不利」) ——『靈樞』癰疽

●邪在脾胃、則病肌肉痛。…皆調于三里。(段「脾胃當謂《脾》、因脾主肌肉」)

——『靈樞』五邪

●夫釋縛脫羶、全真導氣、拯黎元於仁壽、濟羸劣以得安者、非三聖道、則不能致之矣。(段「《仁壽》言《壽》。釋縛脫羶：才罷脫疾病的困縛。黎元：百姓。羸劣：病弱之體。

三聖：伏羲、神農、黃帝) ——『素問』王冰序

釋縛は命を助ける(注1)。拯、濟ともに救の意。三聖道は古典医学。

●今人耳目不明、此陽虛耳聾。(段「《耳目》意為《耳》」) ——趙獻可『醫貫』5・耳論
注1)『春秋左氏伝』僖公六年、「昔武王克殷、微子啓如是。武王親釋其縛、受其璧、而祓之。投降者は後手に縛り、口に璧を含んで死に備えた。

第7節——一貫した表現

「逶進」「連珠」「共用」はともに語句が一貫して、明快な音響効果をともなう共通点がある。

「逶進」は「いちじく、にんじん、さんしょう、しいたけ…」のように相似構造の上下文が上昇または下降の層をなす内容であるもの、「連珠」は「四角は豆腐、豆腐は白い」のように、上文の結語を下文に連結させるもの、「共用」は「蠅が手をする、足をする」で上文の主語が下文にもかかっているように、ある一成分を複句が共用するものである。

1. 逶進 —— 上下が相似構造で層をなす

逶進(リレーして進む)は次の3つの条件をそなえて成立する。

1. 3つあるいは3つ以上の事物が対比されること
2. 事物の間に大小・遠近・軽重などの差別があること
3. 一定の配列順序があること

●萬乗之國、弑其君者、必千乗之家、千乗之國、弑其君者、必百乗之家。

——『孟子』梁惠王・上

この例で3つの条件は、

1. 3つの事物の対比：「萬乗之國」「千乗之家（國）」「百乗之家」；
2. 事物の間の大小の差別：「万一千一百」；
3. 一定の配列順序：「大～小」のようにそなわっている。

通進は層の配列順序から上昇・下降の2種に分けられるが、また主旨の所在から並列・主次・相形^(注1)の3種がある。

注1) 相形は段氏原著では「襯托」とするが、「他のものによって際立たせる」という意味から、第3回の形象表現・4「相形」とそろえる。

[1] 並列通進

通進するすべての項が同じように説明したい事物であるもの。

●脈有一呼再至、一吸再至。有一呼三至、一吸三至。有一呼四至、一吸四至。有一呼五至、一吸五至。有一呼六至、一吸六至。(呼：吐)(再：二回)

——『難経』14難

この「一呼再至、一吸再至」は下文に「脈來一呼再至、一吸再至、不大不小、曰平」とあり、以下「三至爲適得病」「四至病欲甚」「五至其人當困」「六至爲死脈也」と、5項の通進は呼吸に対する脈拍数によって疾病の軽重を分析・診断するもので、層次の別は主次の分を意味しない。

●至于措身失理、亡之於微、積微成損、積損成衰、從衰得白、從白得老、從老得終。(措身：安身)(白：白髮)(終：死) ——嵇康『養生論』

まず具体的には上文の「飲食不節」「好色不倦」を意味する「措身失理」が原因で「微」(おとろえ)に始まり、「損」「衰」「白」「老」「終」の6項の通進が不養生によって人が死に至る段階を説明しており、そのいずれかを強調するものではない。

[2] 主次逡進

逡進する各項の説明したい程度に主次の別があるもの。逡進しながら最後にもっとも強調したいことがくる「提高主次」と、これと反対に最初にもっとも強調したいことから始まる「漸減主次」がある。

① 提高主次

● 疾病所可凭者醫也、醫可据者方也、方可恃者藥也。 ——『本草衍義』

「疾病」「医」「方」「薬」の4層はいずれも説明したい事柄であるが、層を逐って最後に「薬性」を説明する本草の重要であることを強調する。

● 是以醫之不諳治傷寒者、未可醫名也。即治傷寒、勿窮心『傷寒論』者、亦未可醫名也。即能窮心『傷寒論』、而謬執義意、不獲變通經理者、窮亦未可醫名也。

(語：熟知。) ——張志聡『傷寒論宗印』序

「不諳治傷寒」「勿窮心『傷寒論』」「不獲變通經理」の3層は医者に対する3項の要求に反するものをいい、最後の「変通經理」(『傷寒論』の原理を臨機応変に運用すること)がもっとも強調される。

② 漸減主次

● 夫醫藥之要、莫先于明理、其次則在辨證、其次則在用藥。理不明、證于何辨。證不辨、藥于何用。 ——吳儀洛『本草從新』序

「医薬の要」は「明理」「弁証」「用薬」にあるのだが、「明理」をもっとも強調し、層を逐って漸減する。

● 夫微妙在脈、不可不察。察之有理、乃知受病之因。得病之因、則識其證。既識其證、則可詳其所治。 ——嚴用和『濟生方』序

「脈」「因」「証」「治」はいずれも医者が必要治療のために明らかにしなければならないが、察脈こそが知因、識証、詳治の基礎となる。

[3] 相形逡進

逡進される各項のうちただ1項を説明するために他項が引き合いに出されているもの。

説明したい1項が最後にある「提高相形」と、これと反対に最初に説明したい1項がある「降下相形」とがある。

①提高相形

●寧治十男子、莫治一婦人。寧治十婦人、莫治一小兒。此甚言小兒之難也。

——張介賓『景岳全書』総論

「男子」「婦人」は小児病の難治であることを際立たせるために引き合いに出されているのである。

●欲知病之難易、先知病之淺深。欲知病之淺深、先知病之部位。夫人身一也、實有表裏上下之別焉。——徐大椿『医学源流論』表裏上下論

「難易」「浅深」は「部位」すなわち表裏・上下の別を知ることの重要性を際立たせる。

②降下相形

●能醫傷寒、即能醫痘疹。能醫痘疹、即能醫癰毒。——『傷寒論宗印』

「傷寒」「痘疹」「癰毒」の3項は傷寒を治す者は他病をも治すとの主旨を表明している。

●不習經義、不可以論史。不讀史、不可以衡論百家之書。蓋治理之變、莫備于史、而其源必出于經、此古今之通義也。——徐彬『金匱要略論注』序

「經義」「史」「百家の書」の3層を通じて作者の論旨は「經義を習う」ことを強調し、『金匱要略』を経とみなしている。

2. 連珠 —— 上文の結語を下文に連結させる

連珠は「頂真」「蟬聯」「遞句」などともいわれ、上文の結語を下文が取り込み、いわば「銜尾相隨」（前の馬の尾と後の馬の轡が接して進むこと—『史記』匈奴列伝）の情趣をもつものである。

●（例1）地之守在城、城之守在兵、兵之守在人、人之守在粟。——『管子』權修
甲乙丙丁の連続四句において、甲尾乙首、乙尾丙首、丙尾丁首に同一の字が用い

られている。これは連続数句において首尾相同である。俗に「咬字」といわれるものがこれである。

- (例2) 君子萬年、介爾昭明。昭明有融、高朗令終、令終有俶、公尸嘉告。其告維何、… (介：助) (昭：光) (融：長) (俶：始) (公尸：天) ——『詩經』大雅・既醉

この詩篇は1章4句で8章よりなるが、その第2章後半2句から第4章首句までを示した。章末の1ないし2字が次章の冒頭となっている。また第3章の3句と4句も首尾相同である。

連珠は「緊頂式」と「間頂式」の2種に分けられる。

[1] 緊頂式

これは上下文の首尾で相同の字が相接しているものである。

- 恐則精却、却則上焦閉、閉則氣還、還則下焦脹、故氣不行矣。

(却：衰退) (氣不行：氣機不暢) ——『素問』舉痛論篇

形式的には「A則B、B則C、C則D…」式が多く、また内容的にはAの結果がB、Bの結果がCというように因果関係を表すといえる。「恐」の害によって最終的に下焦が脹れ、氣が行らないのである。

- 邪在府則陽脈不和、陽脈不和則氣留之、氣留之則陽氣盛矣、陽氣太盛則陰脈不利、陰脈不利則血留之、血留之則陰氣盛矣、陰氣太盛則陽氣不能營。(營：營運)

——『靈樞』脈度

邪が府に客やどるという原因によって、最終的に陽氣が全身に營運できないという結果をもたらすのである。

- 風寒濕氣客于外分肉之間、迫切而爲沫、沫得寒則聚、聚則排分肉而分裂也、分裂則痛、痛則神歸之、神歸之則熱、熱則痛解、痛解則厥、厥則他痺發、發則如是。(沫：痰か) (分肉：皮内近骨之肉與骨相分者) (分裂：『千金』に「肉裂」) (神歸之：精神歸痛) (厥：厥逆) ——『靈樞』周痺

周痺は脈にしたがって上下し、あまねく全身に及ぶが、その原因は風・寒・熱の邪が分肉の間に客り、痰の発生・凝縮、筋肉の痛み、発熱という因果連係を経て最終的に脈

を厥逆して発生する。

また緊頂式連珠には繁簡の別があり、挙痛論篇の例文では上句の「則」字のあとの字の一部のみが下句の「則」字の前に反復される簡式であるが、脈度の例文では上句の「則」字のあとの字が全部下句の「則」字の前に反復される繁式となっている。最後の周痺の例文は繁簡混合式である。

[2] 間頂式

上下文の首尾以外で相同の字が用いられるもので、次の4種がある。

①「合一分」式

● 趺陽之脈浮而數、浮則傷胃、數則動脾。 ——『傷寒論』弁脈法

● 少陰脈弱而濇、弱者微煩、濇者厥逆。 ——『傷寒論』平脈法

先の例では1句の「浮而數」が2句の「浮」と3句の「數」に、後の例では1句の「弱而濇」が2句の「弱」と3句の「濇」に分けて「間頂（頂は頭で受ける）」され、先句で合、後句で分の「先合一後分」式である。

②「合一分一合」式

● 脈浮而滑、浮爲陽、滑爲實、陽實相搏、其脈數疾、衛氣失度、浮滑之脈數疾、發熱汗出者、此爲不治。 ——『傷寒論』弁脈法

● 寸口脈浮而遲、浮脈則熱、遲脈則潛、熱潛相搏、名曰沈。趺陽脈浮而數、浮脈即熱、數脈即止、熱止相搏、名曰伏。 ——『金匱要略』水氣

先の例では1句の「浮而滑」が2句の「浮」と3句の「滑」に、分けて間頂され、2句の「陽」と3句の「實」が4句の「陽實」に合わせて間頂されている。後の例も全く同じ構造をしていて、「先合一中分一後合」式である。

③「合一分一分」式

● 寸口脈微而濇、微者衛氣衰、濇者榮氣不足、衛氣衰面色黃、榮氣不足面色青。

——『傷寒論』平脈法

● 寸口脈浮而遲、浮即爲虛、遲即爲勞、虛則衛氣不足、勞則榮氣竭。

——『金匱要略』消渴小便不利淋病脈証并治

先の例、1句の「微而濇」を2句の「微」と3句の「濇」が分けて間頂、2句の「衛氣衰」と3句の「榮氣不足」を4句と5句が分けて間頂している。後の例も全く同じ構造をしていて、「先合一中分一後分」式である。

④「合一分一分一合」式

●寸口脈浮而緊、浮則爲風、緊則爲寒、風則傷衛、寒則傷榮、衛榮俱病、骨節煩疼、當發其汗也。——『傷寒論』弁脈法

●寸口脈弦而大、弦則爲減、大則爲朮、減則爲寒、朮則爲虛、寒虛相搏、此名曰革。(朮：浮大而軟，按之中央空，兩邊實)(革：有似沈伏，實大而長微弦)——『傷寒論』

先の例、1句の「浮而緊」を2句の「浮」と3句の「緊」が分けて間頂、2句の「風」と3句の「寒」を4句と5句が分けて間頂、4句の「衛」と5句の「榮」を6句で合わせて間頂している。後の例も同じ構造で、「先合一次分一継分一後合」式である。

3. 共用 —— 上文の一成分を複句が共用するもの

通常は一つの詞語はある句子の中でのみ作用し、他句子の中で語法関係を生じることにはありえない。しかし他句子に語法関係を生じる修辭格があり、「共用」と呼ばれる。

●督見孔父之妻於路、目逆而送之、曰「美而艶」。——『左氏伝』桓元

逆は迎えるの意で、督が道で出会った美人を目で迎え、通り過ぎるのを見送ったのである。目は状語として逆と送の2句の動詞に共用される。

共用とよく似た現象に省略があるが、共用と省略の相違は次のように説明されている。まず共用は古代の簡明な語言習慣に由来するもので補足する必要がない場合に行われ、さらに補足を加えた場合に原意を損なってしまう場合もあり省略とは異なる。

●詔光祿大夫劉向校經傳・諸子・詩賦、歩兵校尉任宏校兵書、太史令尹咸校數術、侍醫李柱國校方技。——『漢書』芸文志

これら劉向以下4名の登場する4句は動詞「詔」を共用しているが、これを省略とみなして任宏以下3句に「詔」を補足してしまうと4度の詔勅が下されたことになる。事実

は漢の成帝は一度の詔勅に全内容を包括したのである。

医書において見られる共用には次のようなものがある。

[1] 主語の共用

- 『内経』散論諸病、非一状也。流言治法、非一階也。(流言：論述)(一階：一途)
——張從正『儒門事親』2
- 聖人之情、因數以示、而非數之所能拘。因法以顯、而非法之所能泥。用定穴以垂數、而非奇正之所能盡。——『鍼灸大成』穴有奇正策
- 聖人之所以全民生也、五穀爲養、五果爲助、五畜爲益、五菜爲充。
——徐大椿『医学源流論』
- 此天下後世之幸、亦吳子之幸也。(此：吾友鞠通吳子懷救世之心…作爲是書)(幸：後世の幸運と吳の希望)——吳鞠通『温病条弁』汪廷珍叙

[2] 謂語の共用

- 怪當今居世之士、曾不留神醫藥、精究方術、上以療君親之疾、下以救貧賤之厄、中以保身長全、以其養生。但競逐榮勢、企踵權豪、孜孜汲汲、惟名利是務、崇飾其末、忽棄其本、華其外、而悴其內。(曾：乃)(崇：重)(悴：傷)
——『傷寒論』張仲景序
- 吾觀太史公之傳淳于意、則意之醫案也。陳壽之傳華佗、則佗之醫案也。李延壽之傳徐文伯、則文伯之醫案也。(太史公：『史記』の著者・司馬遷)(傳：立伝)(陳壽：『三国志』の著者)(李延壽：『南史』の著者)(徐文伯：五世紀の医師)——『名医類案』

[3] 定語の共用

- 上古神農始嘗草木而知百藥、黃帝咨訪岐伯・伯高・少愈之徒、內考五藏六府、外綜經絡血氣色候、參之天地、驗之人物、本性命、窮神極變、而鍼道生焉。
(咨訪：詢問)(本：依拠)——『甲乙經』序
- 其中陳陳相因者、蹇澀未暢者、繁沓不檢者、前後重複異同互見者、觸目皆是。
(陳陳相因：旧態依然)(蹇澀：閉塞不通)(繁沓：往来頻繁)——周学海『詠医隨筆』序

[4] 状語の共用

- 昔、歐陽氏暴利幾絶、乞薬于牛醫。李防御治嗽得官、傳方于下走。(暴利：急性下痢)(牛医・下走：走方郎中—鈴医ともいう牛に鈴をつけ薬を乗せて歩いて往診した昔の医者)
——趙学敏『串雅内篇』序
- 唯細問情由、則先知病之來歴。細問近状、則又知病之深淺。(情由：いわれ)
——江筆花『筆花医鏡』望聞問切論
- 故凡欲治病者、必以形體爲主、欲治形者必以精血爲先。
——張介賓『景岳全書』伝忠録・治形論

[5] 介詞の共用

- 第欲以慎重與否觀其仁、而怯懦者實似之。穎悟與否觀其智、而狡詐者實似之。果敢與否觀其勇、而猛浪者實似之。淺深與否觀其博、而強辯者實似之。(第：唯)
(欲：欲察)(猛浪：孟浪・魯莽^{るもう}に同じで無鉄砲)(淺深：学識が深い)
——『景岳全書』病家両要説・知真医
- 自炎皇辨百穀、嘗衆草、分氣味之良毒、軒轅師岐伯、遵伯高、剖經絡之本標、爰有『神農本草』三卷。(炎皇：神農)(軒轅：黄帝)(本標：起始)(爰：ここに)
——顧景星『李時珍伝』

[6] 連詞の共用

- 又到病家、縱綺羅滿目、勿左右顧盼、絲竹湊耳、無得似有所娛、珍羞迭薦、食如無味、醞醪兼陳、看有若無。(珍：珍重に)(羞・薦：すすめる)(迭：代)(醞醪^{れいらく}：美酒)
——『千金方』1・大医精誠

この縦は讓歩連詞である。

- 儻一言失當、則遺禍無窮、一劑妄投、則害人不淺。(儻：もし)
——『景岳全書』伝忠録3・誤謬論
- 苟不明其源、溯流不得清也。不辨其類、療治不得當也。
——周揚俊『温熱暑疫全書』序

儻・苟はいずれも仮設連詞である。